

918-G34㊦



1200500759052

8

4

(2)



始



27. 5. 20

918
G34
(2)



早稻田大學教授 窪田空穂譯

伊勢物語・落窪物語

〔現代語譯國文學全集第一卷〕



發兌 非凡閣

~~720~~
~~51~~

解
説

本篇は平安朝文學の代表的のもの、中より、「伊勢物語」と「落窪物語」との二篇を選んだものである。今、この二書につき、例によつて簡單なる解説を添へる。

伊勢物語

1 「伊勢物語」は、我が古典の中、最も註釋の多いもので、従つて批評の對象とされてゐることも最も多いものである。その批評は主として、何時の代に誰が書いたものかといふ點にかゝつてゐる。本書も、古典の物語の多くと同様に、その點が全く不明なのである。それにも拘らず、

今に定説といふべきものがない。大體として平安朝初期のもので、「竹取物語」と並ぶべき古い物であらうといふこと、筆者は、在原業平か、或はすべてが彼ならずとも、その大部分は彼であらうといふ説に落着かうかとして、ほゞ定説に近い趣をなしてゐるといへる。

「伊勢物語」は國文學研究者によつて、今日では「歌物語」といふ名をもつて呼ばれてゐる。

「歌物語」とは歌を主としたる小説といふ意である。この名は適切にその内容を語つてゐる。

「伊勢物語」はまさにさうした物である。

本來、傳説と歌とは、それ／＼その必要があつて、別途に生まれたものであるが、その各々を興味として見ようとし、その上では、二つの物を一つに繋ぎ合せると一段と濃厚な物にならうといふ工夫は、極めて古い時代から起つてゐる。これは古事記・日本書紀・萬葉集にも溯り得るもので、ありありと認められるものである。「伊勢物語」はこの工夫の延長したもので、平安朝といふ時代の好尚に合せる爲に、その歌を主として戀歌にし、傳説の方を、當時の代表的の色好みであつた在原業平の事蹟として、歌を主に、事蹟の方は興味を主として、或る物を事實をそのままに、或る物は空想を驅使して組立て、歌と事柄との間に有機的な關係を附け、構

成を與へて、興味の濃厚な物に化したのである。大體戀歌は、一般性の多いもので、迎へて解さうとすれば如何やうにも解せるゆとりのある物である。これを興味のあるものとしようとし、その爲には空想も避けまいと思つて對へば、その歌を頂點とした、一つの劇的な光景を描き出すことは、文藝の才を持つてゐる人には、誘惑を感じさせられる思附きで、同時に又、效果の收めやすい事柄である。まして時代は、歌を最高の文藝とし、戀愛を生活上の至上のものとしてゐた平安朝時代である。かうした思附きに對して喝采を送る者は、その工夫者の周圍に充ち満ちてゐたのである。「伊勢物語」はさうした事情のもとに生まれ出たものである。

「伊勢物語」の工夫者の思附きは以上だけではなく、今一つ大切なものがある。本來歌はその時時のもので、一時的のものである。一時的の歌を主としてそれに合せるやうに構成する事柄も、従つて一時的な、言ひかへると断片的なものである。「伊勢物語」の内容は、これを成行きに任せると、當然、断片的の物語の積重ねとならなくてはならない。然るにこの物語の工夫者は、それに年代的の順序を與へて、此の物語に、在原業平の一代記であるが如き趣を持たせたのである。この物語の工夫は、断片的な物語を工夫した點よりも、この組織を工夫した事の方

に、重大性があるといへる。

しかしこれとても、この工夫者の根本から工夫したものをいへない。從來あつたものに、或る新たなる思附きを加へたといふ程度のものである。それは古事記・日本書紀の、歌を持つた傳統は、一國の歴史としての形において、はあがあるが、年代的に連続してゐるものである。この一國を一人に代へれば、謂はゆる一代記となるのである。その一人を在原業平とすれば、即ち「伊勢物語」である。在原業平は、當時の趣味、好尚において捉へられた人物である。その點から見れば、上代の歴史における傳説を、一代記に進展させたいといふことは、結果から見れば大きい事であるが、これを思附きといふ上から見れば、さして骨を折つたものではなかつたかも知れぬ。更に又、「伊勢物語」はその出来た年代が不明で、多分は平安朝初期とされてゐるが、もし少し引下げることが許されるとすれば、「古今集」の歌の排列の順序の時間的になつてゐるのと、同じ心持からされたこと、も見られるもので、此の思附きは、更に容易なものとなる譯である。

「伊勢物語」は、平安朝中期には、「在五が物語」、「在五中將日記」といふ名によつて呼ばれて

ゐた。「物語」は古い傳説を書き記した物の意で、今日では小説である。假字文の日記は、大體、自叙體の小説である。中期頃には、新たに生まれて來た「日記」即ち一代記と目されるやうになつたのである。一つの物が、「物語」から「日記」へと、認識の上で進展したのである。餘事ではあるが、「伊勢物語」の性質を語つてゐることである。

此の物語の作者の誰であるかは、全く分らない。又後から追加した部分もあるやうだといはれてゐるが、その誰であるかも固より分らない。その分らないのは、かういふ物語を作ること、を名譽だとは感じてゐず、文藝の才の高い人が、創作慾に刺戟されるまに、慰みとして書いたものなのであらう。それが本質的に優れた物であつたのと、時代の好尚に叶つて愛讀されたが爲に後世に傳はつたのである。

物語のことは既に一言したが、この物語が一段毎に、「昔、男ありけり」と斷つてゐるのは、物語その物の體を備へさせようが爲に意圖的にしたことである。文章が素朴で、簡潔であるのも、同じく物語といふ意圖に叶はしめようとした爲と思はれる。

この物語を書くに當つて、作者が材料とした物の中には、當時はあつて、後には傳はらな

つた在原業平の歌集があつたのではないか、そしてその歌集は、この物語の材料ともなり、「古今集」の資料ともなつたのではないか、この物語と「古今集」との関係は、同じ物を材料としたといふ間接的な関係において、ははないかといふ疑を筆者は持つてゐる。一言いひ添へて置く。

落窪物語

「落窪物語」は、平安朝時代の物語中の代表的の一書で、「源氏物語」を代表の中の代表、第一のものとするれば、此の書は直ちにそれに亞ぎ得るもので、第二の物といへよう。まことに珍重すべき物語である。

この物語も、その作られた時代、作者が、全く不明である。しかし「源氏物語」、「枕草子」などに引かれてゐる所から見て、それに先行する物であることは確かで、又「源氏物語」が「竹取物語」を「物語の親」といつてゐる所から見て、それ以後のものであることも確かであ

る。大體、「竹取物語」、「宇津保物語」の後に出来、「源氏物語」よりも前の物だつたことは明らかである。その年代も漠然と、圓融、花山以前の物とされてゐるだけで、それ以上には分らない。作者も誰とも分らず、源順の作ではないかともいひ、甚しきは後世の擬作ではないかなどともいふが、何れも根據のないものである。大體、文藝的の才能に秀でた、頭腦の明敏な男子によつて、今より約九百年以前に作られた物語といふことだけは動かないことに思へる。

「落窪物語」の特色は、名は物語として昔の事にしてあるが、事柄としては當時の唯一の讀書階級である貴族社會の、中納言の娘と、同じく左近大將の息子で左近少將である人との結婚物語である。これを單に事柄の上からいふと、「竹取物語」、「宇津保物語」と異なる結婚譚ではあるが、作者の創作態度といふ上から見れば、「竹取」は天上の世界に絡ませ、「宇津保」は外國に絡ませ、何れも神秘的な事件を相應に取り入れて、それによつて讀者の興味を繋かうとしてゐるのに、此の物語は、さうした物は全然まじへず、徹頭徹尾現實的なものとしてゐるのである。即ち浪漫的より現實的に展開させたもので、その點名著「源氏物語」と軌を一にしてゐる。九百年の昔、創作態度として既にかうした物があつたといふことは、單にそれだけでも國

際的に誇示すべきことゝいへる。

物語の構成は、現實的であることを覘つてゐる當然の成行きとして、極めて單純である。中納言は、一夫多妻の當時の風習のまゝに、皇家血統の姫君の許に通ひ、一女を擧げたが、姫君が早世したので、その一女を自分の家へ引取つて、嫡妻の保護のもとに置いた。嫡妻は、多妻時代の當然の心持として、繼娘を粗略にして、室も落窪に置き、衣服も普通には與へず、この繼娘の裁縫の上手なのを儲け物にして、娘や婢の衣裳を眠る間もないまでに裁縫させてゐた。繼娘には以前から阿漕といふ侍女が一人あつて、主君を憐んで離れずゐるたが、帯刀を役としてゐる夫を持つと、その夫を介して我が主君の姫君と、左近少將とを結婚させた。嫡妻は繼娘の結婚によつて家を出てしまふのを惜しみ、奸計を用ゐて押籠めると、左近少將は、妻となつた姫を憐むと共に繼母の嫡妻を憎み、妻を偷み出し、嫡妻に對して報復を計つて、數々の報復をしたが、後、自身の榮達と共にその妻も貫祿ある者となし得た後、妻の父、兄弟に恩を施し、中納言一家を歸服せしめたといふので、大體は困難に始まつた事が、結婚を通してめでたしに終つたといふ筋である。

しかし此の筋の運びは單純ではなく、相應に複雑してゐる。その複雑は、心理の自態を通したもので、言ひかへると、性格の必然性を通しての複雑となつてゐて、そこには殆んど無理な所がない。否、物語の中に現れて来る人々の何人かは、その面目が躍如としてゐる。繼娘の運命をなしてゐる父中納言の、人が好いだけで物が分らず、妻の自由になつてゐる所、嫡妻の、根は悪人ではないが、身勝手な、慾深な、えらがりな、剛情で折れることの出来ない性分、繼娘の、才はあるがひかへ目で、可愛ゆげのある所、阿漕の、誠實な、熱つばい、才走つた所、左近少將の、男氣のある、怨めば晴らさずにはゐられない、しかしさつぱりとして、細かい事にも氣の届く所、さうしたそれ々の性格が、事件を通して現はれつゝ、展開しつゝ行くところ、讀んで行つて如何にも現實的だと思はせ、生活様式はちがつてはゐるが、これを今日に移しても、まさにかうであらうと思はせられる。それに又、物語の大筋の單純に絡んでゐる部分の複雑は、複雑ではあるが構成が緊密で、遊離してゐるものがなく、十分の客觀化を持つてゐる。讀み行きつゝも作者の頭腦の明敏さを思はずにはゐられないものがある。この事の當然の成行きとして、物語の展開のテンポが相應に早い。このテンポの早さが、此の物語に取つて

は大きな魅力となつてゐる。しかも全體を通じての色調は明るくて、をり／＼取入れてある滑稽が、全體の色調と調和するものとなつてゐるまでである。

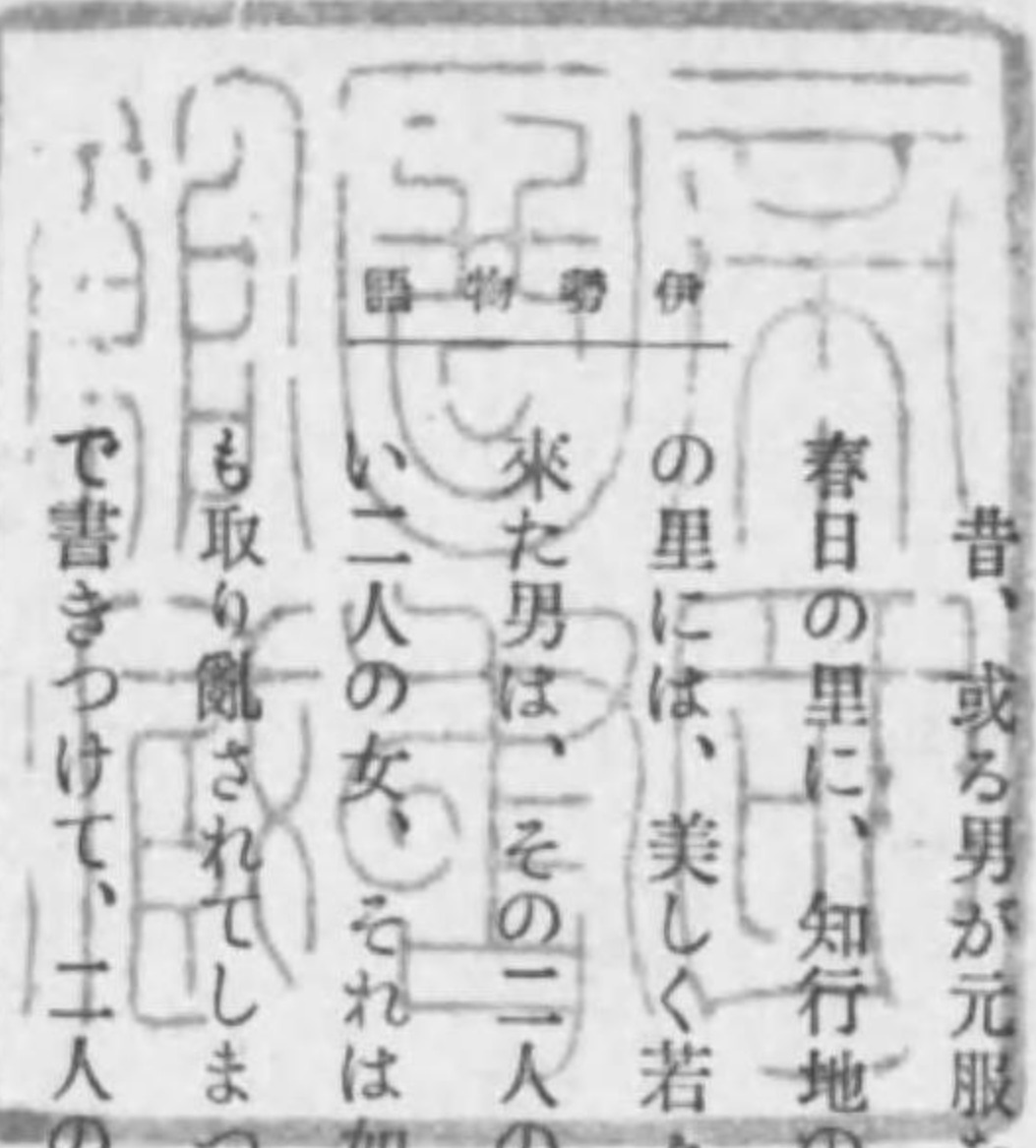
當時多くあつたところの物語は、殆ど皆亡びてしまつて傳はらないので、此の物語を他と比較することは出来ないが、そのたま／＼残つて來たといふことは、此の物語が他の物よりも飛びはなれて面白く、面白いが故に流布してゐた爲ではなかつたかとも思はれる。そしてその面白さは、前にいつた筋の自然さ、人物の性格的なこと、その性格を生かすに足る程度の部分的の細かさなど、要するに従來には見られない現實味の豊かである爲ではなかつたか。即ち此の物語は、當時の讀む階級である上流社會に取つては、新味の豊かな、大衆的の興味のある新作であつたらうと思はれる。

浪漫的であつたものが現實的に展開し、しかも全體を通じての色調が明るく、滑稽味をも含んだものとなつたといふことは、此の物語の作者と讀者との生存してゐた社會が、樂觀され、享樂され、全體的に肯定されるものとなつてゐたが爲の、自然の結果と思はれる。これが又、時代的に「源氏物語」の先驅をなした理由であらう。

猶ほ此の口譯は、「伊勢物語」は浪本蕉一君を、「落窪物語」は辻森秀英君を煩はすことが多かつた。記して謝意を表す。

伊勢物語

初 段



昔、或る男が元服をして、一人前の男となつて、それと共に、今は舊都となつた奈良の都の春日の里に、知行地の有る所から、その下檢分を兼ねて、鷹狩にと出掛けた。さて、その春日の里には、美しく若々しい姉妹の女が、頼るべき親も失つて、心細かく住んで居た。京都から来た男は、その二人の女を隙見をした。思ひがけなくも、荒れた都のほとりに、美しく若々しい二人の女、それは如何にも相應はしからぬものであつたので、一方には憐む心から、男は心も取り亂されてしまつた。男は早速に、著て居た所の狩衣の裾を切り取つて、それへ歌を詠んで書きつけて、二人の女の所へ遣る。其の男は信夫摺しのぶずりの狩衣を着て居たのである。

春日野の若紫の摺衣しのぶのみだれ限り知られず

ち、思ひ惚ぶ心の亂れの限り知られないまでである。「若紫」は姉妹の女、「信夫の亂れ」は男の心の亂れを暗示してゐる。上三句は序であるが、その場の物を捉へてのもの。

と、躊躇する間もなく言つて遣つた。男は、場合柄、取り合せが面白いと思つたでもあらうか。と言ふのは、かの河原の左大臣の歌で誰も知つてゐる所の、

陸奥のしのぶもぢ摺誰ゆゑに亂れ初めにし我ならなくに

〔歌意〕 君以外の誰れの爲に、心の亂れ初めた我ではないを。「しのぶ」は、岩代國の地名「もぢすり」は、顯註には、「この地にて古へ布帛に忍草しのぶの葉莖を種々の色に摺りたる物にて、その文亂髪あふの如く換れる状態れば摺摺もぢすりといひ、地の名をかけては信夫摺摺ともいふ。」といつてゐる。これは異説の多いものであるが、異説は大體、「しのぶ」が地名であるか何うかといふ點にある。今は此の解に従ふ。初句から此までは、意味で「亂れ」にかかる序で、今は「誰れ故に」を隔てて懸つて居る。

といふ歌がある、其の歌の心持で、それを下に置いて詠んだからである。昔の人は斯ういふ、氣轉の利いた風流をしたものである。

註。

春日野の若紫の——古今和歌六帖第五に、同じ歌がある。

陸奥の信夫もぢすり——古今和歌集戀歌四に、作者は河原左大臣として、第四句が、「亂れむと思ふ」となつてゐる。

一一 段

昔、或る男があつた。その時、都は、奈良からは遷つたが、この今の京は、まだ遷されたばかり、人家も立派には建ち揃つて居なかつた頃であつた。その頃、西の京に或る女が住んで居た。其の女は世間並より優つて居たが、取り分け容貌よりは心ざまの方が優つて居た。獨身といふではなかつたらしい。その女に彼の實ある男が關係をつけて、別れて歸つて来て、何う思つたのであらうか、その時は三月の初旬、春雨のそぼそぼと降る日に言つて遣つた。

起きもせず寝もせて夜を明かしては春のものとしてながめ暮しつ

〔歌意〕 起き上りもせず、眠りもしなくて、一晚中を明かしては、晝は又、春の季節の習として、折柄の長雨を眺めて一日暮した。「ながめ」は、長雨と眺めを懸けた懸詞。「眺め」は、嘆きをもつて、見るともなく物を見詰める意の詞。

註。

此の京——ここでは京都を指す。桓武天皇の延暦三年十一月大和の奈良より山城の長岡へ遷都。同十三年十月更に京都へ遷都。

西の京——朱雀大路を境に京を東西に分けたその西方。

起きもせず寝もせて夜を——古今和歌集戀歌三に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつてゐる。

三段

昔、或る男があつた。想ひを懸けて居るだけで、まだ通ふ仲とはならなくて居る女の所へ、ひじきもといふ物を送つて遣つたが、それに斯ういふ歌を添へた。

思ひあらば葎の宿に寝もしなんひじきものには袖をしつゝも

〔歌意〕 この嘆きが消えないならば、世を捨て、葎の宿に寝ましょう。敷物には我と我が袖をすゝる佗びしさをしながらも。「ひじきもの」は、海藻としての其れと、引敷物ひじきものとの懸詞。

これは、
いらつした時の事である。

註。

ひじきもの——鹿尾菜の字を當てる。今のひじき。海藻の事。

四 段

昔、東の五條に皇太后の宮がいらつした時、その御殿の西の對の屋に住んでゐる女があつた。その女の許に、晴れてではなくて、深くも思ひ入つた男が、行き通つて居た。所がその女は正月十日頃に、西の對から何處か外の所へ隠れてしまつた。其の中に、女の居る所は分つて來た。が、其處は普通の身分の人の通つて行かれる所ではなかつたので、男は一層つらい思ひばかりして過して居た。翌年の正月、梅の花の盛りの時に、男は去年を懐しんで、其處へ行き、と見、かう見したが、女の居なくなつた對は、思ひ出の胸に浮んで來る去年の對の有様に較べると、似もつかない。男は感慨に打たれて泣いた。そして其處を立ち去るには忍びなくて、其の對の、戸障子も無い、がらんとした板敷の間に、月が傾いて落ちようとするまで、臥せつて居た。そして去年の事を思ひ出して、歌を詠んだ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

〔歌意〕 月は昔の月ではないが、昔のまゝの月だ。花は昔の花ではないが、昔のまゝの花だ。それに對つてゐる我が身だけは、昔のままの身であつて。(この「我が身」は、詩的常識からいへば、當然推移を思はせられるべきものである。然るに、「もとの身にして」といつて、不變である自然と同じ物にしてゐる。これだと、そこに當然、推移を嘆かるべき人間がなくてはならない。それは餘情としてあるのであるが、「わが身一つは」の「一つ」が、再び此所に働いて來て、「一つ」に對する他の人を聯想させるのである。春夜、懷舊の情に浮んで來る、當然我に伴つてゐるべき、今一人の人で、推移の相に在いて嘆かれる人は、逢つての後逢ひ難くてゐる人でなくてはならない。此處では、即ち、西の對にゐて、雲隠れした女を指してゐる。)

と詠んで、夜がほのぼのと明けかゝり、人目に着くやうになつたので、盡きない心持に泣きながらも歸つて行つた。

東の五條——東の京の五條。朱雀大路の東方。

太後の宮——皇太后宮。此處では五條后。仁明天皇の皇后藤原順子を申す。左大臣冬嗣の女。文德天皇の母后。

西の對——「對」は對の屋で、主殿に對する屋の意。寢殿に斜に對つて、多くは廊で通じる。東、西、北とある。當時の禁中、貴族の邸のもの。ここは女房などが住む。その西の對の屋の意。月やあらぬ春や昔の——古今和歌集戀歌五に同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつてゐる。

五 段

昔、或る男があつた。東の五條の邊に身を寄せて居る女の家へ、極めてこつそりと通つて居た。内々に通つて行く家なので、晴れて門からも入れなくて、家の周圍を繞して居る築土の、子供等が遊ぶ折に踏みあげた、其の壊れた所から出入して、女の許へ通つて居た。其の家は人澤山の家ではないが、度々通つて居る中に、何時か家の主人が聞きつけて、そして逢はせまいとして、男の通路に、毎夜番人を置いたので、それからは、男は其處までは出掛けて見るもの

の、逢はずに歸つて來た。そこで歌を詠んだ。

人知れぬ我が通路の關守はよひく／＼毎にうちも寝ななん

〔歌意〕 人に知られない、即ち忍んでの我が通ひ路に居る關守だけは、いつの夜でも、眠つてくれるといい。

と詠んだのを、女が何うかして聞いて、主人の仕打ちを情なく思つた。その様子を見て、主人もあはれに思ひ、逢はせる事にした。これは、男が二條后内密で通つてゐたのが、他に洩れて、人の口が五月蠅くなつたので、その御兄弟達が、逢はせない爲に、番人を置いたのだとか。

註。

兄人達——大納言國經、昭宣公基經。

人知れぬわが通路の——古今和歌集戀歌三に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

六 段

昔、或る男があつた。女に想ひを懸けて居たが、其の女は、其の男には得られない譯があつたが、男が其れにも拘らず幾年かの間、言ひ寄り續けてゐたが、やうやうの事で、女を家から盗み出して、夜の眞つ闇な中を連れて來た。其の路に芥川といふ川があつた。其の川に添つて行くと、女は、草の上に置いた露を夜目に見て、あれは何ぞと怪しんで男に聞いたが、男はそれには答へる今の場合ではない。志して居る所までは中々遠く、それに夜も更けて居るので、其方にばかり氣を奪はれて居た。と急に、雨が盛んに降り出して來た、それに雷鳴さへ伴つて來た。見ると其處に、戸も無いやうながらんとした倉がある、鬼の居る所と知る由もなく、これ幸ひと女を其の倉の奥の方へ押し入れるやうに入れて、男は弓を手に、胡籥を背に、何事か起つたら防がうと用意して戸口の所に立つて居た。そして心細さから、早く夜が明けて呉れと思ひ思ひして居る中に、其の倉に居た鬼は、早くも女を一口に食つてしまつた。其の中に待ち侘

びた夜もそろ／＼明けて來たので、ほつとして、女はと見ると、折角連れて來た女が居ない。男は口惜しさに、足ずりをして嘆いたが、何の甲斐もない。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なましものを

〔歌意〕 白玉か何であるかと女の怪しんで聞いた時に、あれは露であると答へて、それを同時に、露の消えるやうに、自分も息絶えてしまはうものを。(「消え」は「露」の縁語。)

これは、——、そのいとこの女御のお傍に、お仕へするやうにしておいでになつた時の事であるが、その容貌がひどく愛くしくいらつしたので、わが物にしようと、久しく言ひ寄り續けてゐた男が、到頭、攫つて、我と我が背に負うて出奔したのであつた。それを、その御兄弟である堀川の大巨と、太郎國經の大納言が、この二人はまだ殿上人の身分で参内されて居たのであるが、御所からひどく泣きながら連れ出された女のあることを耳にして、さてはと思ひ當る節があつて、その男の後を追つかけて、女を引きとめて、取り返されたのであつた。かうした事情を知らない人が、女を鬼が食べたといふのであつた。以上の話は、——

事であるとか。

註。

胡録——矢を盛つて負ふ具。當時は旅行などする時には、必ず防身の具を携帯した。
白玉か何ぞと人の——新古今和歌集哀傷歌三に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

いとこの女御——染殿后。大政大臣良房（忠仁公）の女。

堀川の大内——昭宣公基經。大納言國經の弟であるが、官位が上であるから、その前に書いた。

太郎國經の大納言——大納言國經。昭宣公基經の兄であるから、太郎といふ。

七 段

昔、或る男があつた。何等かの事情で、都に居るのが面白くなく工、關東の方へと行つたが、伊勢と尾張との間の海邊にさしかかると、寄せては返る浪が白く湧き立つて居るのを見て、

いとゞしく過ぎ行く方の戀しきにうらやましくもかへる浪かな

〔歌意〕 いやが上にも、過ぎて行く方、即ち、都が、戀しいので、波の寄せて返る、その返るが羨ましく思はれる。「返る」は「行く」に對させた詞。

と詠んだことである。

註。

いとゞしく過ぎて行く方の——後撰和歌集禰旅歌に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

八 段

昔、或る男があつた。何か心に叶はないことがあつて、都に居るのが面白くなくなつたのであらう。田舎である關東の方へ行つて、適當な住み場所をさがさうといふ氣になつて、友達と

して交つて居る人の一人二人ばかりと一緒に رفتつた。都からは既に遠い信濃の國まで来て、そして淺間山の煙を吐くのを見て、火山などといふものを見た事のない目に驚いて、一首を詠んだ。

信濃なる淺間の岳に立つ煙をちこち人の見やは咎めぬ

〔歌意〕 信濃の國の淺間の嶽の上に立つ煙よ、遠くある人も、近くある人も、あれば何ぞと、怪しんで、見とがめないであらうか、見とがめるであらう。

九 段

昔、或る男があつた。何かの事情で、自棄の心を起して、われとわが身を無用のものだとし、もう此の都にも居るまい、田舎の關東の方にも行つて、住むに適當な國を捜さうといふ氣になつて出て行つた。それは一人旅ではなくて、以前から友達として交つて居る人の一人二

人ばかりと一緒に رفتつた。誰もこちらの方の道の様子など知つて居る者も無くて、迷つて歩いた。そして、三河の國の八つ橋といふ所へ着いた。その地名を八つ橋といつたのは、澤から田へ引く水の通る川が蜘蛛手に別れて居て、その川を越す爲に、木の橋が八つ架け渡してある所から、八橋と呼ぶのであつた。一行はその澤のほとりの木が蔭をなして居る所へ、乗つて来た馬から下りて休んで、旅の乾飯を食つた。その澤には、燕子花が面白く咲いてゐた。その花を見て、其の中の一人の思ひ付いて言ふには、かきつばた、といふ五文字を、歌の五つの句の初めに置いて、今我々のして居る旅の思ひを詠んで見ろといふので、男はそれに應じて詠んだ。

から衣きつゝなれにしつしましあればはるぐきぬる旅をしぞ思ふ

〔歌意〕 馴染んだ妻を都に置いてあるので、別れてはるばると来た旅を、ひたすらに悲しく思ふ。〔から衣きつゝ〕は「なれ」の序。妻は「棲」の意で、「衣」、「著」、又下の衣を洗つて張る意の「はるばる」と共に、縁語となつて居る。

さう詠むと、一行の者は、其の歌のあはれなのに感動して、食べて居るかれいひの上に烈しく涙をこぼしたので、かれいひは其の爲にふやけてしまつた。

そこから又、行き行きして、駿河の國へ行つた。道は宇津の山へかゝつて、それを越す事となつた。見ると、登つて行くべき道は、木草に蔽はれて、日光の通さず暗いのに、更に細道である。越す人も無いと見えて、鳶や鷄冠木が生ひ繁つて、道を遮るやうなので、心細くなつて来て、きつと恐ろしい目に會ふ事よと思ふ。さう思つて歩いて居ると、偶然にも修業者の通りかゝつたのに逢つた。其の修業者は聲を懸けて、斯うした道へ、まあ何ういふ譯でおいでになつたのですと言ふので、驚いて見ると、見知りの人であつた。其の人は京へ歸る途中なので、又と無い好い折だと思つて、京に居る戀人の許へ届けてもらはうと、消息を認めてことづけ

駿河なる宇津の山邊のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

〔歌意〕 現はもとより、夢にさへ君と逢はぬが悲しい。(初二句は、その場のものを捉へての序

で、「宇津」が山邊を隔てて、「現」を言ひ起して居る。「現」は「夢」に對して居る。その駿河にある富士山を見ると、五月の下旬だといふのに、雪が眞白に降つて居る。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ

〔歌意〕 時節のいつであるかも知らない山は、富士である、今をいつと思つてか鹿の子まだらに雪の降るのであらう。

其の山は、こゝで例を取ると、高さは比叡の山を二十も重ねた位、形は鹽尻のやうであつた。

猶、行き行きすると、武藏の國と、下總の國との間に大きな河があつた。其の名を隅田川と言つて居る。一行は其の河のほとりに群らがつて居て、限りないまでに遠くも旅をして來た事であるよと、悲しみ合つて居た。と、渡守は、早く舟に乗りなさい、日が暮れさうだと言ふので、舟に乗つて河を渡らうとしたが、一行の者何れも、深く感じた旅のわびしさがまだ紛れない。思へば振り棄てゝは來たものの、京に戀しいと思ふ人の無い譯でも無い。さう思つて居る。

をりから、水の上に、白い鳥で、嘴と脚は赤く、大きさは鳴くらるな鳥が浮んで居て、水面で遊び遊びして魚を取つて食つて居る。京では見あたらない鳥なので、誰も見知らなかつた。渡守に聞くと、これが都鳥なんですよ、と言ふのを聞いて、

名にし負はばいざこととはん都鳥我が思ふ人はありやなしやと

〔歌意〕まことに名に負ひ持つてゐるならば、いざ物をいはず、都鳥よ、我が思ふその人は、世に在るのか、又は無いのかと。

と詠んだので、舟の中の人はずべて、その歌に感動して泣いた。

註。

乾飯——餠。干した飯の意に限らない。旅の辨當といふ程の意。
から衣きつゝなれにし——古今和歌集壽旅歌に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

駿河なる宇津の山邊の——古今和歌六帖に、音にきくうつつ山べのうつゝにも夢にも見ぬに人の

戀しきとある。新古今和歌集壽旅歌には、作者は在原業平朝臣となつて居る。

時知らぬ山は富士の嶺——古今和歌六帖に、同じ歌がある。新古今和歌集には、作者は在原業平朝臣となつて居る。

鹿の子まだら——鹿の子の毛の色のまだらなのをいふ。

こゝ——京都を指す。

鹽尻——鹽を焼く濱で、鹽を富士のやうな形に盛り上げたのをいふ。

名にし負はばいざこととはん——古今和歌集壽旅歌に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

十 段

昔、或る男が、京を出て、遠い武藏の國までさすらひ歩いて來た。さて、そこで、其の國の女に求婚の申込をした。両親はその事を問題として、意見が分れ／＼になつた。父親の方は、居所も定まらないやうな人よりも、安心してやれる別の人に娘を嫁がせようといふのに、母親

の方は、何でも上流の人にと心をつけて居た。それは、父親の方は並々の氏の人であつたが、母親の方は藤原氏の出の人であつた。従つて、自然上流の人をと思つた譯である。此の掣がねに歌を詠んでよこした。女の家のある所は入間郡、三好野の里であつた。

三好野のたのむの鴈もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる

〔歌意〕 この三好野の田の面おもててに下りて居る鴈も、ひたすらに、君が方あたに寄るといって鳴いて居る。「たのむ」は「田の面」と、「頼む」即ち、君を頼みに思ふとの兩意を懸け、又、「よる」は鴈が一所に寄りかたまる、心がその方へ寄る、の兩意を懸けて居る。「鴈」は女の譬となつて居る。

掣がねの、其の歌への返歌。

わが方によると鳴くなる三好野のたのむの鴈をいつか忘れん

〔歌意〕 我が方に寄るといって鳴く所の、その鴈を、いつの時か忘れよう、忘れはしない。「鴈」は同じく女の譬。

と言つてやつた。他國でもやはり、かうした風流は止まなかつた事である。

註。

三好野のたのむの鴈も——古今和歌六帖第六に、同じ歌がある。

我が方によると鳴くなる——古今和歌六帖第六に、前歌と並んで、同じ歌がある。

十一段

昔、或る男が、京を出て、東國へ行つたが、途中から友達等に言つてよこした。

忘るなよ程は雲るになりぬとも空行く月のめぐり逢ふまで

〔歌意〕 我を忘れるな、たとへ道の程は雲居はるかになつたとて、かの空を行く月の、また前の所へめぐつて来るやうに、お互に重ねて逢ふ時までは。「雲」と「月」は縁語。

註。

忘るなよ程は雲るに——拾遺和歌集雜歌上に「よみ人しらす」として、同じ歌がある。

十二段

昔、或る男があつた。その男が人の娘を盗み出して、人目の無い方へと、武藏野へ連れて逃げて行く途中で、盗人だといふので、國守からの追手の爲に搦め取られてしまつた。それは、男が自分の身を危いを見て、女だけを人目に觸れないやうに、草むらの中へ隠して置いて、自分だけ逃げた、それを追つかけて搦め取つたのであつた。さて、又、その後からこの同じ道を追つかけて来た人達が、此の野には盗人が隠れて居るといつて、野に火をつけようとした。隠されてあつた女は心細くなつて来て、歌を詠んだ。

武藏野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

〔歌意〕 武藏野だけは、今日だけは焼くな。今は、夫も籠もつてゐる、我も亦籠もつてゐる。
〔若草の〕は「つま」に懸る枕詞。「つま」は、夫婦の何れをいふ詞。こゝは、女が男を指して居るものと取れる。

と詠んだのを聞きつけて、追手の者は女を捕へて、前に搦められた男と一緒に引き連れて往つた。

註。

武藏野は今日はな焼きそ——古今和歌集春歌上に「よみ人知らず」として、初句が「春日野は」となつて居る。

十三段

昔、京を去つて武藏の國へ行つて居た男が、京に残してある女の所へ、手紙をよこした。その文面に、こんな事を聞かせるのは恥づかしい、と言つて、聞かせないのも心苦しいと書い

て、その上書に、洒落て、むさしあぶみと書いてよこして、その後は音沙汰をしなくなつたので、今度は京の女から男へ手紙が来て、

武藏笠さすがにかけて頼むにはとはぬもつらしとふもうるさし

〔歌意〕 しかすがに貴方は、武藏笠のそのやうに懸けて頼まれるが、それだと、たよりを下さらないのもつらいし、又、たよりを下さるのも厭はしい。〔武藏笠〕は「かけて」の縁語。と詠んであるのを見て、男は居ても立つても居られない心持がした。

とへばいふとはねば恨む武藏笠かゝる折にや人は死ぬらん

〔歌意〕 たよりをすれば、厭はしいといふ、たよりをしなければ恨む、大かたかうした氣持の時に、人は戀ひ死ぬるのであらう。〔武藏笠〕は「かゝる」の縁語。

註。

むさしあぶみ——武藏笠。昔、武藏の國から貢ぎ物として奉つた笠、馬の鞍の上に懸けて、兩足

を乗せる物である所から、そなたを懸けて思ふといふ意味を籠めて、「武藏より」と書く代りに、「武藏笠」と風流に書いたのである。

十四段

昔、或る男が、京からは遠い陸奥の國まで、心ならずも行つてしまつた。其の國の一人の女が、京の人といふので、もの珍らしく感じたのであらうか、心に深く其の男を思つた。その女が歌を詠んでよこした。

なか／＼に戀に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

〔歌意〕 なまじつか戀ひ死にしようよりは、いつそ蠶になつた方がましである。たとひ暫しの間でも。(蠶は生命の短いものであるが、一つの繭の中に雌雄二こもりなどして、契深いものであるから。)

人柄と共に、歌までも田舎びて居る。さうした女であるが、でもやはり憎めなく思つたのであろうか、或る夜女の許へ行つた。が、暁を怨むほどの心持にもなれず、まだ夜深い中に家を出て来たので、女は歌を詠んだ。

夜も明けばきつにはめなでくだ雞のまだきに鳴きてせなをやりつる

〔歌意〕夜が明けたらば、狐に食はせてしまはう、阿呆鶏が早鳴きして、夫を歸してやつてしまつた。「くだ雞」の「くだ」は「腐」で、鶏をのこした詞。「はめなで」は「はめなん」の誤寫。

と詠んだ。さて其の男が京に歸る事になつたので、女に歌を詠んでやつた。

栗原のあねはの松の人ならば都の苞にいざといはましを

〔歌意〕ここの、栗原のあねはにある、あの姿のよい松が、若し人間であるならば、都の人への土産に、さあ行かうといはうものを、裏に、そなたが美しい人であつたならば、都へも連れて行かうものを。

と言つてやると、女はその裏の心は汲みとれずに、嬉しがつて、やはりあの人を私を思つて居たのだと言ひぐさにして居た。

註。

なか／＼に戀に死なすは——萬葉集卷十二に、「なか／＼に人とあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり」とある。

栗原のあねはの松の——古今和歌集東歌には、初二句が「小黒崎みつの小島の」となつて居る。

十五段

昔、京から陸奥へ行つて居た男が、その何といふ程の事も無い、軽い身分の人の妻の許に忍んで通つたが、その女はさうした身分にも似ず、不思議なくらるまで度ましくして居て打ち解けた風も見せないのので、男は歌を詠んでやつた。

しのぶ山忍びて通ふ路もがな人の心の奥も見るべく

〔歌意〕人の心へ忍んで通つて行かれる道があればいゝ、分け入つて、心の奥までも見究はめたく思ふを。「信夫山」は「忍び」の序。「道」「奥」は「山」の縁語。

女は、その歌を、限りなきまで結構なものには思つたが、自分は陸奥みちのくといふやうな、さうした悪い土地に居る女、その鄙みやこびた心を、都の男が見透すかしてしまつた上は、何としよう、捨てられるにきまつて居ると思つて、わざと返歌もせずすにしまつた。

註。

しのぶ山忍びて通ふ——古今和歌六帖第二に、同じ歌がある。

十六段

昔、紀の有常といふ人があつた。仁明、文徳、清和と、三代の帝みかどにお仕へした人で、一時は時勢にも逢つて勢がよかつたが、其の後は、時勢も變つて行き、又時代も移つてしまつたので、零落して、世間並みの人のやうでさへも無くなつた。が彼は人柄としては心が綺麗で、上品な事が好きであつて、外の人とは違つて、活計の爲に心を勞するといふやうな事も無かつた。現在貧しくて居ながらもやはり、以前よかつた時と同じ心持で、日常の生計の事も知らずに居た。年來連れ添つて、お互に馴染んで居た彼の妻は、彼がかうした有様で居るので、だんだん愛想も盡きて、とう／＼世を捨て、尼になつて、その姉で、以前から尼になつて居る人を便たよつて、其處へ身を寄せることになつた。有常は、妻とは本當に心から睦み合つたといふ仲では無かつたが、今を生涯の別れとして出て行くのを見ると、しみじみしたものを感じた。そして、斯うして夫婦別れをする際には、夫から妻に物を遣るのが當然の例なので、それを爲したいと思つたが、貧しく暮して居るので、何うする事も出来なかつた。あゝ思ひ、かう思つて思ひ屈ひした揚句、懇意に付き合つて居る友達の所へ、手紙で訴へてやつた。實は、斯様々々の次第で、妻はこれまでの御縁といつて出て行くが、何も、少しの事もしてやる事が出来ないと書い

て、其の終に、

手を折りてあひみしことを數ふれば十といひつゝ、四は經にけり

〔歌意〕 指を折つて、一しよに世を經て來た年を數へて見ると、十年と言つて、その十年も四度まで經て來た。裏に、随分長い間の仲であるのに、何もしてやる事の出來ないとは。

手紙を送られた友達は、それを見ると、しみじみとした心持にならされて、自分の着物に、夜の寢道具迄も揃へて贈つた。其れに一首を添へた。

年だにも十とて四は經にけるをいくたび君をたのみきぬらん

〔歌意〕 經難く長いものにする年でさへ十度びと數へて、更にそれを四度も繰返して經て居る。

その長いのを思へば、妻の君の、いかに幾度びも君を頼みとして來られた事であらう。

とやさしくも言つてやると、有常が歌を送つて、

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

〔歌意〕 此の着物こそは彼の傳へ聞く所の天上の羽ころもであらう、如何にも美しい。尤もなことである、斯うした美しい物を、美しい君が御衣に奉つたのは。

と言つてきたが、嬉しさに堪へられなくて、更にまた歌を送つてよこした。

秋や來る露やまがふと思ふまであるは涙の降るにぞありける

〔歌意〕 わが袖の濡れるのは、秋となつて、そのあはれさから斯う濡れたのであらうか、それとも、露が降つて來てこゝに置きまがふのであらうかと思はれるまでであるが、それは一に君のなさけの嬉しさに落つる涙の爲であつた。

註。

紀の有常——正四位下紀名虎の子。少時、仁明天皇に侍奉す。位四位下周防權守に至り、元慶元年卒す。年六十四。因に、文徳天皇の第一の皇子惟高親王の御生母は名虎の女。清和天皇は文徳天皇の第二の皇子。

文徳天皇の第一の皇子
惟高親王の御生母は
名虎の女

十七段

昔、幾月も無沙汰をして居た人が、櫻の花の満開の頃に花見にとやつて来たので、主人である女が歌を詠んだ。

あだなりと名にこそたてれ櫻花年に稀なる人も待ちけり

〔歌意〕 散りやすい物だといふ評判は立つてなれ、櫻花は、實際はその反対で、一年の久しい間にも稀にしか来ない人をも、このやうに待つてゐた事ではある。といつて、裏に、浮氣な女だといふ評判こそ立つてなれ、私は實際は眞實な者で、一年の久しい間にも稀にしか来ないあなたを、このやうに待つてゐた事ではある。

男の返歌。

今日来ずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや



〔歌意〕 待つたといふが、もし今日自分が来なかつたならば、明日は早くも雪の如くに降ることであらう。又、その雪が、たとへ消えずにゐようとも、花と見られようか、花ではない。といふ裏に、待つたといふが、自分がもし今日来なかつたならば、明日は早くも心が移つてしまつてゐよう。たとへあなたの身はあらうとも、我が物と見ようか、見られはしない。(「明日」は「今日」に對させたもので、忽ちの意。)

註。

あだなりと名にこそたてれ——古今和歌集春歌上に、「よみ人しらす」として、同じ歌がある。今日来ずば明日は雪とぞ——古今和歌集春歌上に、前歌への「返し」として同じ歌がある。作者は業平朝臣となつてゐる。

十八段

昔、心驕りした女があつた。男がその女の近隣ちかどなりに住んで居た。女は歌の詠める人であつたの

で、男の心を試みようと思つて、菊の花の散り際になつたのを折つて、それに添へて歌を贈つた。

紅にほふはいづら白雪の枝もとを、に降るかとも見ゆ

〔歌意〕 白菊の花が移らふと、紅に映えるといふ事であるが、それはいづくであるぞ。今此の菊を見るとまだ眞白で、白雪が枝も拗むまでに降つたのかと見える。裏に、兼々好色の君だとは聞くが、私に對しては、さうした氣振りもお見せにならない事である。

男は女の下のは分つたが、態と知らない振りをして、何氣なく詠んで返した。

紅にほふが上の白菊は折りける人の袖かとも見ゆ

〔歌意〕 移ろつた白菊の、既に紅の色のさして居るのに、更にその上に白い所のあるのを見ると、此の花を折つた君の、袖口の襷袢の色かとも美しく見える。

十九段

昔、或る男が、宮中に仕へて居る然るべき女の許に使はれて居る女房である人と相契つた。が幾程もなく通つて行かなくなつてしまつた。男も女も、使はれて居る所は同じ所なので、女には、流石にその男が目に着くのであるが、然し、男の方は、さうした女の世に在るものとも思つて居ない。それが女はたまらなくなつて歌を贈つた。

天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆるものから

〔歌意〕 疎遠にも人のなつて行くことではあるよ。さうは云ふもの然し、その姿の我が目には見えてゐながら。「あま雲の」は、遠い物の意で、「餘所」に懸かる枕詞。と詠んでよこしたので、男は返歌をした。

天雲のよそにのみしてふることは我がるる山の風早みなり

〔歌意〕 空の雲が行き歸りして、中ぞらにはかり過してゐるといふことは、己が落ちついてゐるべき山の風が早いのによつてである。裏に、我の慌しく行き歸りして、何方つかずに過してゐることは、我が住むべき御身が、世の當ではないからである。

と詠んでやつたのは、其の女は又他にも男を持つて居たからだといふ事である。

註。

天雲のよそにも人の——古今和歌集戀歌五に、「業平の朝臣、きの有常がむすめに住みけるを、うらむことありて、しばしのおひだ、晝はきて、夕ざりは歸りのみしければ、よみてつかはしける。」の詞書があつて、同じ歌がある。
行きかへり空にのみして——古今和歌集戀歌五に、前歌の「かへし」として、初句が「ゆき返り空にのみして」とある。作者は業平朝臣となつて居る。

二十段

昔、或る男が大和に住んで居る女を見初めて、求婚をして、遂に、通ふ仲となつた。暫く一緒に居たが、其の男は宮仕へをして居るので、いつまでもさうしては居られず、山城へ歸る事にした。その途中で、時は三月であつたが、楓の若芽の極めて美しく紅葉したのを折つて、女の許へ、途中から贈つてやつた。

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋の紅葉しにけり

〔歌意〕 君に贈らうと思つて折り取つたこの枝よ、時は今春ではあるが、このやうに、秋に見るやうに深く紅葉して居る。裏に、我が心の深さも、丁度此の紅葉のやうである。

と言つてやつたが、その返事は、男が京へ着いてから持つて來た。

いつの間にうつろふ色のつきぬらん君が里には春なかるらし

〔歌意〕 いつの間に、かうも紅葉したのであらう。思ふに君の居られる里には、今は春であるにかゝばらず、春といふものがなく、もう秋なのでもあらうか。裏に、君が心はもはや私といふものを飽きてしまはれたのであらうか。

大和——奈良京の邊を指す。この物語は平安朝の初期を舞臺として居る。即ち、京は山城の京都へ遷されて間も無い頃である。が前の京、大和の奈良の方には、まだ新しい京に移り切らずに居た者があると思はれる。此の女もその一人であつたらう。

二十一 一段

昔、或る男と女と、お互によく理會して、意見を異にするといふ事も無く居た。それが、何ういふ譯であつたのか、ちよつとした事から、女は、二人の間を厭はしいものと思つて、其の家を逃げ出さうとして、斯うした歌を詠んだ。そして其れを、自分の室の壁か障子のやうな物に書きつけた。

山でていなば心輕しといひやせん、世のありさまを人は知らねば。

〔歌意〕 わたしが此の家を出て行つたならば、心の輕薄な女だと大方の人は言ふであらう。わた

し邊の間が何ういふ有様であるか、堪へられぬ有様であるのも、人は知らないの。

と詠んで置いて、逃げ出してしまつた。男は、此の女がこのやうに書置きして行つた歌を見て、何とも合點が行かず不思議な事である、何も心置きするやうな事のあつた覚えも無いのに、何ういふ事から家出をしようとするまでの氣になぞなつたのであらうと残念がつて、取り亂すまでに泣いて、たとへどこへ行つたにもせよ、どこへまでも捜しに行つて連れ戻さうと思つて、門口に駈け出して、あちらを見、こちらを見、見まはしてみたが、さて何處を心當てに捜しに行くといふ見當も附かないので、しほくと家の中に引返して、

思ふ甲斐なき世なりけり年月を、あだに契りて我やすまひし

〔歌意〕 思ひ頼んで居た、その甲斐も無い我々夫婦の中ではあつた。今までの長い年月の間、わたくしは浮いた心で契つて居たのか、否、眞實に契つて居たものを。

と言つて、空を眺めて物思ひをして居た。そして又、

人はいさ思ひやすらん玉かづら面影にのみいとゞ見えつゝ

〔歌意〕 女の方はわたくしを思つて呉れて居るのか、如何うであらうか、心が分らない。わたしには、玉かつらをした女の面影ばかり、そこにあらはれて見え見えて居る。

さて其の女は、大へん久しい間、其の儘で居た。心の中では、男が捜し當てゝ呉れゝばいゝと思つて居たが、さうもならないので、こらへ兼ねたのもあらうか、そちらから歌を送つて来た。

今はとて忘るゝ草の種をだに人の心に蒔かせずもがな

〔歌意〕 今はもうこれまでの中であつたとして、もとのやうには成らうとあなたは成さらないでせう、それは致し方が無いにしても、せめてあなたの御心の中に、忘れ草の種を蒔かせたくない、即ち、わたしといふものを忘れては戴きたく無い。「忘れ草」は薫草のことで、それを植ゑると物を忘れるといふ言ひ馴らはしのある草。

男の返し歌。

忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし

此の歌の贈答で、一旦切れた中が繋がつて、又も二人は、以前にも勝つて優しく言ひ合つた。そして男が、

忘るらんと思ふ心の疑ひにありしよりけに物ぞ悲しき

〔歌意〕 一旦わたしを忘れたそなたであるから、復も忘れるかも知れないと思ふ疑ひがある爲め以前にも勝つて、そなたの戀しいと思ふと共に、何となく悲しい心持もする。

と歌ふと、女の返歌。

中空に立ちゐる雲の跡もなく身のはかなくもなりにけるかな

〔歌意〕 頼みとする君に心を疑はれるやうでは、他に寄る邊の無いわたしは、丁度あの中空に立ちつ居つて漂つて居る雲のやうに、命の消えてしまふことであらう。(この歌「なり」にけるかな)

では、本文の前後に通じ兼ねる「なりぬべきかな」とあるべきである。

と言つたが、改めて夫婦となると、さう言ひ合つたにもかゝらず、いつか疎くなつてしまつて、以前のやうにしつくりとは行かなかつた。

註。

古今和歌集戀歌四に、「よみ人しらす」として、「忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ戀しき」とある。

二十二段

昔、通ひつ、通はせつして居た男と女が、これと取り立て、言ふ程の事情も無くて、その中が絶えてしまつたが、忘れてはしまはなかつたのであらう、女の許から歌を贈つて來た。

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつゝ猶ぞ戀しき

〔歌意〕君のしわざを憂く思ひながらも、やはり君を忘れられないので、一方ではつらい人と恨みながらも、一方では戀しい、

と言つて來た。男は、それ見たことか、自分の思つた通りだと言つて、返しの歌をやつた。

逢ひみては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ

〔歌意〕逢ふと前のやうないやな事も起るから、互に眼のあたりには逢はずに、心でだけ思ひを交し合つて居よう。かの河の中にある鳥をめぐつて流れる水の、其の鳥に妨げられて別れるが、復た一つに合つて流れる。丁度あのやうに、わたし達も絶えずに。〔逢ひ見ては〕では「心ひとつに」に意が通り兼ねる。「逢ひは見て」とあるべきである。「かはしま」は、河の中にある鳥と、心を交すといふ兩方の意を懸けて居る。

と言つたが、言つた歌とは違つて、間も置かず、早速に其の夜女の許へ行つて宿つた。以前は心が足りなかつた、此れから先はあゝした淺はかな心は起すまいなどと話し合つて、男が歌を詠んだ。

秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらん

〔歌意〕 秋の長い夜の、その千夜の長いのを一夜になぞらへて、そして一しよに寝たならば或は飽くといふ事もあらうか。飽く時のあると思へない我が心である。

と言ふと、女が返しの歌を詠んだ。

秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉残りて雞や鳴きなん

〔歌意〕 お言葉の通り、秋の長い夜の、その千夜を一夜になし得ても、思ふ心は語り盡くせない、まだ話す言葉の残つて居る中に、夜明を告げる鶏が啼くであらう。

と言つた。それからは男は、以前にも勝つて女をかはしいものに思つて通つて行つた。

註。

逢ひみては——續後撰和歌集戀歌四に、初句が、「逢ひはみで」となつて、作者は業平朝臣となつて居る。

✓
二十三段

昔、京から近傍の田舎へ行商をして活計を立て、居た人の男の子と女の子と、隣り同志の所から、門にある井戸のほとりに出て一緒に遊んで居たが、大人になると互に恥づかしい氣がして、顔を合はせなくなつて居た。が男は心の中で此の女を妻に得たいと思つた。女の方では、また、此の男を夫に持ちたいと思つて、そして親達が、他の男と結婚させようと見合はせるけれど、断つてしまつて承知しなくて居た。その中に隣の男から斯ういふ歌を贈つて來た。

つゝるづつるづつにかけしまろがたけ過ぎにけらしも妹見ざる間に

〔歌意〕 門にある筒井の井筒、その井筒の下に立つて、井筒に言ひ掛けくらべたわたしの身の丈も、今は井筒を越して高くなつたやうである。顔も合はせなくなつて居る中に。

女が返し歌を詠んで來た。

くらべこし振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき

〔歌意〕 どちらが長いかと言つては較べ合つて来たわたしの振り分け髪、それも丈が伸びて、今では肩も越すやうになつた。此の髪よ、そなたならぬ誰か手を觸れよう。(「あぐ」は文字の上では、髪をあげる、即ち、髪を結ふ事。)

斯ういふ事を言ひ合ひ、言ひ合ひして、とう／＼初めからさう思つたやうに一しよになつた。さて斯うして一しよになつて、幾年か立つ中に、女の親が歿して、大切な稼人が無くなつて居られようかと言ふので、(男の親は先に死んでしまひ、たよつて居た女の親も次いで死んでしまつたので、男も女も共に奮發して)男は、親や舅のやうに田舎行商を始めて、河内の國の高安郡の方へ出懸けて行つた。と、そちらでもつて、新しい女が出来てしまつた。男は氣がとがめたが、併し此の前からの女は、何とも言はず、いやな事をして居ると思つて居るらしい氣振りも見せなくて、男が家を出ると言ふと、言ふ儘に出して遣るので、男は不思議に思ひ出し

て、此れは、ひよつとすると、女が仇し心があつてからでは無いかと疑ひ出して、試みてやうと思つて、河内へ行く様子をして家を出て、前栽の中へ隠れて女の様子を窺つて居た。と女は、心を込めてお化粧をして、思はし氣に外を見遣つて、

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり行くらん

〔歌意〕 立田山を、夜、君がひとり越えて行くことであらうか。(「風吹けば沖つ白浪」は、風が吹くと、沖つ白波が立つと續き、立田山へ「立つ」で懸かる序。「立田山」は大和國平群郡龜ノ瀬越。河内へ行く途中にある山。路の悪い山として聞えて居る。)

と詠むのを聞いて、男は女の心を限りなきまでにあはれに感じて、それからといふものは、河内の女の所へは、殆んど行かないやうになつてしまつた。さて、たまに男が、彼の高安の郡へ来て見ると、逢ひ初めた頃は奥ゆかしい様子を装つても居たが、もう今は打ち解けて、さうした心遣ひもせず、自身杓文字を持つて、飯を笥子の器物に盛つて居る風を見ると、今まで思つて居た女とは違つた、厭はしい女に思へて、つく／＼情なくなつて、それぎり通つて行かな

くなつた。男が行かなくなつたので、女は男の居る大和の方を眺めて、

君があたり見つゝを居らん生駒山雲なかくしそ雨は降るとも

〔歌意〕せめて君の居る大和の方をなりとも眺め眺めて、心遣りにして居よう。その大和の目じるしにでる伊駒山を、雲と隠すな、たとへ雨の降る日であるとも。〔見つゝを居らん〕の「を」は意味の無い助辭。「生駒山は大和國の高山。大和と河内の境界をなして居る。〕

と言つて、山の姿を雲の間から見出しては慰めとして居た。所が、こちらの心が先方へ通じたのか、やう／＼の事で、大和の人がやつて来ようと言つて来た。嬉しがつて待つて居たが、空頼みになつて、何度も何度も来ないでしまつたので、

君來んといひし夜毎も過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつゝぞ寝る

〔歌意〕君が来ようと言つて、たびたび来なくなつたので、今はもう絶えた中だと諦めては居るものゝ、やはり忘れられずに戀ひ戀ひして寝て居る。

と言つてやつたけれども、男は絶えて通はなくなつてしまつた。

註。

つゝゐ——筒井。筒のやうに掘つた井といふ。

振り分け髪——髪のを結ばずに、分けて垂らした。當時の童女の風。

前栽——庭の前の植込。

風吹けば沖つ白浪——古今和歌集雜歌五に、「題しらす」よみ人しらす」として、最後が「越ゆるん」となつて居る。

筒籠——筒子。飯をもる器。

君があたり見つゝを居らん——萬葉集卷十二に、「君があたり見つゝを居らん生駒山雲なたなびき雨は降るとも」となつて居る。

二十四段

昔、或る男が女と一しよに片田舎に住んで居た。男は御所奉公をすると言つて、妻と別れるのをつらがりながら出て行つたが、それぎり便りも無くて、三年も過ぎてしまつた。女は待ちに待ち侘びて居ると、外の男で、非常に親切に言ひ寄つて来た人があつたので、其の男に、今夜は逢はうと約束した。そこへ思ひがけずも前の男が歸つて来た。そして、こゝをお開けなさいと言つて戸を叩いたが、女はさうした事情なので、直ぐに戸を開ける譯には行かない。と言つて、戀しいと思つて居る連れ添つて来た夫である、なま中の隠し立てもしない。で戸を開けずに、先づ歌を詠んで戸の内から出した。

新玉の年の三年を待ち侘びてたゞ今宵こそ新枕すれ

〔歌意〕 三年といふ間、便りがあるか、あるかと待つて、待ち侘びてしまつて、もう仕方が無いと諦めて、今夜初めて、他の男と相逢はうとして居るのである。(「新玉」は年の枕詞。)

と言つて出したので、男は返し歌をした。

梓弓まゆみ槻弓年を経て我がせしがごとうるはしみせよ

〔歌意〕 梓弓、眞弓、槻弓と、弓に幾品もあるやうに、夫にも幾通りもある。されば、わたしがそなたの前の夫として、連れ添つて来た幾年の間、そなたをば麗はしみ、仲よく過ごして来たやうに、そなたも今度の夫を麗はしみ、仲よくせよ。裏に、其の境遇によつては、思ふに任せぬ身もある。わたしも宮仕へをして居た自由の無い身であつた。そなたにそむいたのでは無く、便りが出来なかつたのである。思へばわたしは、幾年の間そなたを愛して来た、それを軽々しくわたしにそむいてしまつて。

さう言つて、そこを立ち去らうとしたので、女は、男が弓を夫に譬へたのを、反對に女自身に譬へて、歌を詠み返した。

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにしものを

〔歌意〕 仰しやる所の梓弓、その弓であるわたしは、あなたの引く引かないにかゝはらず、兎に角に此の心は昔から、あなたにはかり寄つて居たものを。即ち、あなたが手にとらうと、とるまゝいと、とにかくに、わたしはあなたばかりを思つて居た。(「引く」と、弓を引くと本と末と一つに寄つてくる、その「寄る」とは、共に、「弓」の縁語。)

と言つたが、男はそれつきり何も言はずに、そこを立ち去つてしまつた。女は深く悲しんで、男の後に附いて、引き留めようとして追つて行つたが、女の足のおそく、追ひ附かれずに、その中に息が續かなくて、水を飲まうとも思つたのであらうか、冷たい清水のある所へ立ち寄つて、そこに倒れ伏してしまつた。そして、そこにある岩の上へ、指を嚙んで血を出して、その血で、歌を書き附けた。

あひ思はで離れぬる人をとゞめかね我が身は今ぞ消えはてぬめれ

〔歌意〕こちらで思ふのに、あちらでは思つて呉れずに離れて行つてしまふ。其の人を引き留める事の出来ぬ悲さしから、わたしの身は今消え果てさうである。

と書き残して、その儘其處で死んでしまつた。

註。

三年來ざりければ——女は自立の出来ないものである所から、當時の法律として、夫が行方が知れなくなつてから三年過ぎると、妻は他の男と結婚してもかまは無い事になつて居た。

新玉の年の三年を——續古今和歌集戀歌四に「讀人しらす」として同じ歌がある。
梓弓引けど引かれど——古今和歌六帖第五には、二、三句が、「末のたづきは知られども」となり
續後撰和歌集には、第二句が「引きみ引かずみ」となつて居る。

二十五段

昔、或る男があつた。逢ふまいとは言ひ切らずに、どこことなく情けあるらしくして居る女の許へ、言つてやつた。

秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はで寝る夜ぞひぢまさりける

〔歌意〕秋の野で、笹原を踏み分けて通つた朝の、その露に濡れた袖よりも、逢はずして歸つて来た夜の方が、一層涙に濡れたことである。「袖」は、露にひぢる上では、衣を代表させた物。涙の上では、それを拭ふもので、両方に懸けてある。

と言ふと、逢はうとも逢ふまいとも言はずに男を釣つて居る、其の女の返しの歌。

みるめなき我が身をうらと知らねばやかれなで蟹の足たゆく来る

〔歌意〕海松布のない、即ち相逢ふ時のない我が身を、浦即ちその人につれない者と知らないのであらうか、中絶もせずして、海人即ちその男の、足のだるくなるまでも我が所へ来る。〔「みるめ」は、「海松布」と「見る目」を懸けたもの。「浦」は、上の海松布の生えてある浦と、「うら」の「う」を、憂の意で懸けたもの。「蟹」は、海松布を刈る者の意で、男の喩。〕

註。

色好み——所謂好色の意味ではない。男女間の情趣を味はふ方面を主とした言葉、即ち、耽美主義といった意味。

秋の野に笹分けし——古今和歌集戀歌三に、作者はなりひらの朝臣となつて居る。

みるめなき我が身を浦と——同じく古今和歌集戀歌三に、前歌と並んで、作者は小野小町となつて居る。

二十六段

昔、或る男に、知る人の所から手紙が来て、そなたには、彼の五條あたりの女を、とうく得ずなられた事である、眞にお氣の毒であると悔みを言つて来た、その返事に、

思ほえず袖に湊の騒ぐかな、もろこし船の寄りしばかりに

〔歌意〕思ひもかけずに我が袖は、港に浪の騒ぐがやうにも涙が繁くこぼれた。それは其の港に唐船、即ち大きな船の寄つて来たやうに、優しくもそなたの弔つて呉れた程に。〔「騒ぐ」は「浪」の縁語。〕

二十七段

昔、或る男が、或る女の許に通ひ初めた。そして一晩行つたぎり、それぎり行かなくなつたので、女の親は、娘の甲斐なさと、男の薄情とに腹を立て、しまつて、口惜しまぎれに、娘が手を洗つて居る所へ来て、盥の上にある貫簀を取つて投げ棄てた。と盥に溜つて居る水の上に、恥づかしさと悲しさで、娘がはらくと涙をこぼして泣く影が映つて見えた。娘は自分で、

我ばかり物思ふ人は又もあらじと思へば水の下にもありけり

〔歌意〕 わたし程に物思ひをする者は、廣い世の中にも又とはあるまい、と思つて居ると、水の下にも、やはりわたしのやうに泣いて居る者があつた。

と歌を詠んだ。それを彼の、來なくなつてしまつた男が傳へ聞いて、

水口に我や見ゆらん蛙さへ水の下にて諸聲になく

〔歌意〕 水口の所にわたしが居て、そなたを思つて泣いて居た。其の姿がそなたに見えたのであ

らう。と其の水口に住んで居る非情の蛙までも、わたしの泣くのにほだされて、一しよに聲を合はせて啼いた。

註。

一夜いきて——男が女に通ひ初めると、長く續くと續かないとにかゝばらず、三夜までは通ふのが、當時の習慣となつて居た。一夜きりで來なくなつたのは、女の方からいふと如何にも馬鹿にされた仕うちである。

貫簀——竹を編んだもので、水をつかふ時に、水の飛び散らない爲のもの。

水口——田へ澁ぐ水を、一時田の口の所へ溜める爲に、まるく堀を掘つて置く、その名。

二十八段

昔、耽美主義の女が、男を見限つて出て行つてしまつた。男は女の心がわからないで未練がましく、

などてかくあふごかたみになりにつけん水漏らさじと結びしものを

〔歌意〕 何うして斯う逢ひ難くもなつたのであらう。ふたりの中は、水も洩らすまいと言つた深い契りであつたのに。「逢ふごかたみ」は逢ふ期のありがたきの意で、期を籠に懸けて「水」を言ひ起して居る。即ち、籠に汲む水は洩れて出るのを、戀の契りに反いて出でいくのに譬へて居る。

二十九段

昔、東宮の御母女御にお仕へして居る人の催された花の賀があつたが、其の賀をする爲に召し加へられた近衛司であつた人が斯ういふ歌を詠んだ。

花に飽かぬ歎きはいつもせしかども今日の今夜に似る時はなし

〔歌意〕 花に飽かない嘆きは、いつの年もしては來たが、今日の今夜の嘆きに似る深い嘆きはした事がない。「花」は女后を暗示して居る。

註。

女后——二條后を指すと云ふ。

花の賀——春、花の咲く時にする賀を花の賀、秋の紅葉の頃ならば紅葉の賀、季節によつての名。近衛づかさ——業平を指すと云ふ。

三十段

昔、或る男が、稀にしか逢はない女の許へ歌を贈つた。

逢ふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心の長く見ゆらん

〔歌意〕 逢つて寝ることは玉の緒のやうに短く思はれるのに、君の我に對するつらき心ばかりは

如何なれば長く見えるのであらう。「玉の緒」は貫きつられた玉と玉との間をいふ。短いことの譬喩。

註。

あふ事は玉の緒ばかり——新勅撰和歌集戀歌五には、「よみ人しらす」として、五句が「ながくもあるかな」となつて居る。

三十一段

昔、或る男が、宮中で、或る女房達の居る局の前を通りかゝると、一人の女房が、其の男を何によつての仇敵と思つたのであらう、よし／＼、黙つて、爲るに任せて置いて、草の葉の霜に逢つて移つて行くやうに、得意にして居る人の衰へて行く有様を見てやらうと言ひかけたので、男は歌を詠んだ。

罪もなき人を呪へば忘れ草己が上にぞ生ふといふなる

〔歌意〕 罪も無い人を咀ふと、其の科めは自分の上に返つて来て、忘れ草が自分の身の上にも生えて、人に忘れられるといふやうな悪い報いがあると聞いて居る。「忘れ草」は薫草で、それを植ゑると物を忘れるといふ言ひ馴らしたのある草。

三十二段

昔、或る男が、以前關係した事のある女に何年か經過した後、

古のしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

〔歌意〕 繰り返して、昔を今にする方法も欲しいものである。「しづのをだまき」の「しづ」は、倭文布の意で、上代からあつた織物で、青と白とを織り混ぜた、今日でいふ縞物である。これをしづり、しどりとはいひ、しづともいつた。縞物が珍らしい意で、重んじられた物。「孝環」は、

それを繰る爲の苧、即ち麻を績んだ糸を卷いた所の卷子の稱。初二句は、下の「繰り返し」に繰り返し、繰り返し巻きつける意で懸かる序。

と言つて遣つたが、女は何とも思はなかつたのであらうか、返しもよこさなかつた。

註。

古のしづのをたまき——古今和歌集雜歌上に、「よみ人しらす」として、第三句以下が、「いやしきもよきも盛りはありしものなり。」となつて居る。

三十三段

昔、或る男が、攝津の國の菟原郡に住んで居る女の許に通つて居たが、其の女は、男が今度京へ歸つて行くと、もう再び來まいと思つて居るらしい様子を見て取つて怨みを言つたので、男は慰めて、

蘆邊より滿ち來る潮のいやましに君に心を思ひますかな

〔歌意〕 海邊の蘆のあたりに滿ちて來る潮の、次第に増して來るやうに、わたしの心もそなたに思ひ増して行く事であるよ。

と詠むと、女の返し歌。

隠江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき

〔歌意〕 籠り江のやうに、心の中で思はれるあなたの心持は、さうは仰しやるけれども、わたしには、其の江の舟にさす棹の、何うして其れと指しては分りませう。〔隠江〕は、山かげなどに隠されて籠もつてある江、其れを籠もつて居て分らないといふ意で用ひて、更に、其の江にある舟にさす棹のと續けてある。〕

と詠んだ。これらの歌は、田舎人の歌としては善いのであらうか、悪いのであらうか、分らない。——實は、作者自身の歌なので、善いとは思つて居ながらも。

註。

葦邊より滿ち來る湖の——萬葉集卷四に、山口女王の歌として、下句が「思へか君が忘れかれつる」となつて居る。伊勢の作者が、この歌の下句だけを改作したのである。
隱江に思ふ心をいかでかは——續後撰和歌集戀歌一に「業平朝臣のもとより君に心をといへりける返り事に」の詞書があつて、「讀人しらす」として同じ歌がある。

三十四段

昔、或る男、自分に無情な女の許に言つてやつた。

いへばえにいへばねば胸に騒がれて心ひとつに歎く比くらかな

〔歌意〕 それと口に出しては言ふことが出來ず、さりとて、言はなくて居ると胸ばかり騒いで、まぎれる術すべも無く、我が心一つでのみ嘆いて居るこの日頃よ。

と言つた。思ひ屈した餘り、男としての面目などかまつて居られず言つてやつた歌であら

う。

註。

いへばえにいへばねば胸に——古今和歌六帖第四には、「言へばえに言はねば苦し世の中を嘆きてのみも過すべきかな」となつて居る。

三十五段

昔、或る男、心の變つたからでは無く、何等かの事情のあつた爲に中の絶えた女の許へ言つてやつた。

玉の緒を泡緒に搓りて結べれば絶えての後もあはんとぞ思ふ

〔歌意〕 我々の中は、玉の緒を、あわ緒あわに固く纏まとつて結んだやうな中である。普通の緒は、絶えると新たにすが、我々ののは、絶えてもまた結び合はして用ひるやうな緒であるので、一旦は絶

えたものゝまた元のやうに逢はうと思ふ。「泡緒」は、後世にあわむすび、あわぢむすびなど言ふ結び方で、固く、容易には絶えない撻り方で、下の「撻る」「結ぶ」はその縁語。「あはん」は泡緒に音の似て居る所から、その照應の言葉となつて居る。

註。

玉の緒を泡緒に撻りて——萬葉集卷四に、紀女郎が大伴宿禰家持に贈つた歌として、下句が「ありて後にもあはざらめやも」とある。

三二十六段

昔、或る男、契つた女の許へ久しく通つて行かなかつたので、女の許から、お忘れになつたのでありませうと言つてよこした手紙の返事に、

谷狭み峰まではへる玉かづら絶えんと人に我が思はなくに

〔歌意〕 谷の狭さに、峰までも這ひ上つて居る玉かづらの長く續いて居るがやうに、わたしも行く末長く通はうと思つて居る。絶えようなどとは思つて居ないのに。——なぜそんな怨を言ふのであらう。

註。

谷狭み峰まではへる——萬葉集卷十四に、第二句「峰にはひたる」、第四句「絶えんの心」となつて居る。

三十七段

昔、或る男が、耽美的な女と契りを結んだ。さうした氣風の女であるから、男が通つて行かない留守の間、何ういふ事があるかも知れぬと心もとなく思はれたのであらう、男が歌を詠んだ。

われならで下紐しもひ解くなあさがほの夕影待たぬ花にはありとも

〔歌意〕我ならぬ、外の男の爲にそなたの下紐は解くな。櫛かみの花のやうに、朝咲いて、夕影を待たずに萎しぼむ移りやすい花ではあるとも。「あさがほ」は女の髻。「下紐」は下裳の紐で、男女相逢ふ時にのみ解くものとされて居る。

それに答へて、女の返し歌。

二人して結びし紐を一人して逢ひ見るまでは解かじとぞ思ふ

〔歌意〕二人して結びあつたこの紐は、又逢ひ見るまでは、一人では解くまいと思つて居ります。

註。

われならで下紐解くな——新勅撰和歌集戀歌三に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。二人して結びし紐を——萬葉集卷十二に、下句が「我は解きみじ直にあふまでは」となつて居る。

三十八段

昔、紀の有常の家へ訪ねて行つたが、生憎主人は外出して居て、その歸りも遅かつたので、待ちあぐんで、その友達の言つてやつた歌。

君により思ひならひぬ世の中の人はいふをや戀といふらん

〔歌意〕他へ行つて却々歸つて来ない君を、今、歸るか歸るか待ちながら思ひ習つた思ひよ、斯うした思ひを世の中の人はいふ、戀といふのであらう。

返し歌。

ならばねば世の人毎に何をかも戀とはいふと問ひしわれしも

〔歌意〕わたしは戀といふものを習はないので、何うしたのかも知らなかつた。で世の中の人言葉によく戀、戀といふ、それは何ういふものであらうかと尋ねたぐらゐであるのに。——そ

のわたしから君は戀を習はれたといふと、わたしは君の戀の師の譯である。

註。

君により思ひならひぬ——續古今和歌集戀歌一に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

三十九段

其の御殿の隣りに住んで居た男
が、——見ようと思ひ、態と人目を包んで女車に同車して出かけて行つた。ちつと
永い間、そこに待つて居たが、——が挽き出されて來ないので、がつか
りしてしまつて、もう見まらせず、そろ／＼歸らうとして居る時に、天下髓一の靴美派であ
る源の至いたるいふ人、これも同じく——、そこへ來て居たが、其の男

の乗つて居る車を、見かけの通り女車だと思つて、側へ寄つて來て、とやかくと様子ぶつた仕
ぐさをして居るうちに、彼の至いたるは、その邊りに飛んで居たと見える螢を取つて、其の相手方の
車の中へ放したので、其の男は、螢の照らす火でもつて、自分の同車の姿を見られては興がさ
めると、——燈火ともし——即ち、螢の火を消さうとして、そして、其の男が歌を詠んだ。

出でていなば限りなるべみともし消ち年經ぬるかと泣く聲を聞け

〔歌意〕 御子の御車みこくるまが、今將に出られようとして居るが、出て行かせられたならば、此れがこの
世での限りである。それで、お見送の人々が悲しんで、人の命は燈火ともしの消えるが如しと言ふが、
それにしても年を経たまひし君であらうか、御齡も若くましますにと泣いて居るあの聲を聞け
よ。——さうした色めいた仕ぐさなどする場合とは場合が違ふでは無いか。(「ともし消ち」は、
法華經に「如三焰盡燈滅」又、王充論衡に「人之死也。猶火之滅。」とある意に、前の螢の火の
消ゆるを、御子の御命の盡き給へるによそへてのもの。)

と言ふと、かの至いたるが返し歌をした。

いとあはれ泣くぞ聞こゆるともし消ち消ゆるものとも我は知らずな

〔歌意〕 仰言る通りひどくあはれにも泣く聲が聞こえる。併し言はれる所の燈火、その消え行くやうにもみまかられた命とは、わたしは思はない。——彼の佛説の、此の世に於ける死は、眞に滅するのでは無いといふ事を聞いて居るから。「消ゆるものとは云々」は、法華經に、「我雖レ滅レ」
説ニ涅槃ニ則是非眞滅トある意。

と返しをした。が天下第一の耽美派の歌としては、未だしく、上手とも思はれぬ歌である。さて、この至は彼の源の順したかの祖父にあたる人であります。——
 たものです。

註。

至——源の至。楊院大納言定卿の子。父定卿は崇子内親王のいとこ。

順——源の順。和漢の學藝に通じ、詩歌に堪能。天曆中宮中の梨壺に出仕して、萬葉集に調點を附し、後撰和歌集を撰んだ梨壺の五人の一人。著書に、「和名類聚抄」がある。

四十段

昔、或る若い男が、人柄は卑しくない召使の女に思ひをかけた。ところが、男には賢かしこ立たてる親があつて、斯うして置いては、思ひが移つてしまつて、取り返しが附かなくなるであらうと考へて、其の女を餘所へ逐ひやらうとした。さうは言つたものゝ、未だ、逐ひやりもせず、元の儘にして暫く様子を見て居た。若い男は、親の仕打ちが不服ではあるが、親がかりの身で、その上、氣の弱い性質であるので、正面から親にあたる勇氣は無い。女も亦、卑しい召使の身であるので、逐はれまいと争ふ力は無い。さうして二人とも堰かかれて居る間に、相思の情は愈々増さつて行く。二人の様子を見て居た親は、それと見ると俄に、其の女を逐ひ出した。

男は悲しさに堪へられず、泣きに泣いて、血の涙を流すまでに悲しんだが、それでも女を引き留めるべき術が無い。女は下人に連れられて出て行つた。男は泣く泣くも歌を詠んだ。

出でていなば誰か別れの難からんありしにまさる今日は悲しも

〔歌意〕 厭つて、強ひて出て行くのであつたならば、誰か別れを難しとしよう、わたしはさうした中では無い。親に堰かれて、悲しいと思つたかの在りし日、その日にも増して今日の悲しさよ。

と詠んで、氣絶してしまつた。親は慌てしまつた。やはり本人の爲めだと思つて、あゝいふ意見もしたが、まさかこれ程までに思ひつめて居ようとも思はなかつのに、本當に息もしなくなつたので、まごまごして、正氣にかへるやうにと神佛に願なども立て、祈つた。氣絶したのは今日の入相時で、翌日の戌の刻になつて、やう／＼の事で息を吹きかへした。昔の若い者は、浮き／＼して居るべき時にも、さうした好き心から深い物思ひをした。今の世では、物思ひをして然るべき老年者も、正にさういふ事をしようか、しようとは思はれない。

註。

出でていなば誰か別れの——古今和歌六帖第四に、初句を「厭ひては」として、作者は業平となつて居る。

戌の時——今の午後八時から十時までの間を言ふ。

四十一段

昔、姉妹の女があつた。一方は身分の卑しく、貧しい男を、他方は上品な男を夫に持つて居た。卑しい男を夫に持つた方は、十二月の下旬、せめて、正月は垢の附かない袍を夫に著せたいと思ふ所から、自分で洗濯をして、そして張つた。心は十分に盡したのであるが、もともと、さうした卑しい手業は習つて居なかつた所から、つひ其の袍の肩のところを張らうとして破つてしまつた。代りの袍も無し、何うする事も出来ず、唯悲しさに泣き続けるばかりであつた。其の事を一方の上品な男が聞いて、氣の毒に思つたので、それは清らかな緑衫の袍を早

速に見つけ出して、そして贈つて遣らうとして、歌を添へた。

紫の色濃き時は目もはるに野なる草木ぞ別れざりける

〔歌意〕 紫の根の色の濃い時には、見渡し遙かに、同じ野にある草木も、全く差別がない。裏に我が妻を深く思ふ心から、妻のゆかりの者も、やはり愛しく思はれる。

と言つてやつたが、それは彼の「紫の一本ゆゑに、武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」といふ歌の心であらう。

註。

緑衫の袍——六位の官人の着る緑色の袍。

紫の色濃き時は——古今和歌集雑歌上に、同じ歌がある。作者はなりひらの朝臣となつて居る。

四十二段

昔、或る男、耽美的な女とは承知しつつも、其の女と馴染んで行つた。心の置けない女だとは思ふけれども亦憎くは無かつた。さうした女なので、間を置かずに屢々通つて行つた。屢々行つて居ても、やはり不安はあつた。が、其れでも、行かすには居られない中であつたので、行つて居たが、二三日の間、男は差支が出来て行く事が出来なくなつた。で斯う歌を詠んで遣つた。

出でて來し跡だにいまだかはらじを誰が通路と今はなるらん

〔歌意〕 わたしが、そなたの家を出て來た時の足痕、それさへまだ變らずに、そつくり其の儘にあると思へるのに、其の同じ路は、今は誰の通ひ路になつて居るのであらう。

と言つたのは、女の心の疑はしさから詠んだのであつた。

註。

出でて來し跡だにいまだ——新古今和歌集戀歌五に、上句を「出でていにし跡だに未だ變らぬに」として、作者は業平朝臣となつて居る。

四十三段

昔、賀陽の御子と申す親王がましました。其の親王は、女を御心に懸けられて、誠によく慈んで使はれた。で、多くの女が宮仕へ申して居たが、其の中でも、優れて艶いて居る一人の女をば、耽美的な若者達は黙つて其の儘にしては置かなかつた。或る一人の若者が、其の女と關係して居るのは、自分一人だと思つて居たのに、其の事を、以前から關係して居た他の男が聞きつけて、怨みの手紙を遣らうとして、女を時鳥に譬へた歌を遣らうとする所から、しやれて、時鳥のかたを造つて、それに手紙を添へて遣つた。歌は、

郭公汝が鳴く里のあまたあれば猶疎まれぬ思ふものから

〔歌意〕時鳥よ、そなたの啼く里は數多あるので、そなたを思つては居るものよ、やはり疎まれる。〔時鳥〕は女の譬。〕

と言つた。と女は、男の機嫌を取つて、

名のみたつしでの田長は今朝ぞなく庵あまたと疎まれぬれば

〔歌意〕數多の里に啼くなどと無き名を立てられた死出の田長は、さう言はれる悲しさから今朝は啼いて居る。庵數多に憎まれる所から。即ち、わたしは今朝泣いて居るが、其ればあなたに、無い事を言はれる悲しさからである。〔死出の田長〕は時鳥の別名、時鳥は死出の山から出て来て、農時を勧める、といふ古い傳説がある。庵數多は田長と言つた縁から、田のほとりには、田を作る人の居る庵の多くあるので、單に多くの人といふ意味。〕

時は恰も五月であつた。男は返し歌をした。

庵多きしでの田長は猶たのむ我が住む里に聲し絶えずば

〔歌意〕庵多き、そこそこ啼く死出の田長は、疎ましいものではあるが、やはり頼みにする。わたしの住む里に、聲を絶たずに啼くといふならば。——兎に角そなたの心さへ私から離れないならば。

註。

賀陽の親王——桓武天皇第七の皇子。
郭公汝が鳴く里の——古今和歌集夏歌に、「よみ人しらす」として、同じ歌がある。

四十四段

昔、或る男があつた。知人が、京を離れて任國へ行くので、其の人に餞別しようと思つて、自分の家へ招いた。其の人とは疎い中では無かつたので、妻も其の席へ出して、盃を差させて、そして餞別の物として、女の装束一襲を贈らうとした。それに添へる歌は、主人の男が詠んで、それを妻の手でそこにある装束の裳の腰の所に結び着けさせた。その歌、

出でて行く君が爲にと脱ぎつれば我さへもなくなりぬべきかな

〔歌意〕 旅へと出でて行く君に贈らうとして裳を脱いだので、今はも無しになつた。即ち君もわざわざひ無く、我までもわざわざひ無くなるべき事であるよ。〔裳〕は「喪」の懸詞。

さて、此の歌は、作者の歌の中でも、別けて面白いから、面白いとするだけで、人は心にかけて讀まうとしない。がよく腹におさめて讀めば、深い味はひのしみ出る歌である。

註。

出でて行く君が爲にと——古今和歌六帖第四に、第二句を「君を祝ふと」終句を「成りにけるかな」として、作者は業平となつて居る。

四十五段

昔、或る男があつた。さる人の大切に居る娘が、何うかして此の男と契りたいと思つて居た。が、娘心に、それと言ひ出す事が出来にくくあつたのであらう、黙つて、包んで居る

中に、其の爲に病氣になつてしまつて、いよく死にさうになつた時に、實は斯うく思つたのだがと、仕へて居る者に心を洩らした。それを親が聞きつけて、娘の心が可哀さうで、泣く泣く男に話したので、男は娘の息のある中にと、夢中になつて駆けつけたが、間もなく娘は死んでしまつた。男は其の儘、爲す事もなく、さみしい様で、其の家で娘の喪に籠もつて居た。それは六月の下旬の、大へん暑い頃であつた。宵の中は棺の前で、若しや、その面白さに死人が歸つて來はしまいかと、管絃の遊びをして、夜が更けるとや、涼しい風が吹いて來た。と、螢が見えて、高く舞ひ上がった。男は其れを臥しながら見て、

行く螢雲の上までいぬべくは秋風吹くと鴈に告げこせ

〔歌意〕 飛ぶ螢よ、あの高い空の上まで往くなら、秋風と共に歸り來るか。鴈に、秋風が吹くと告げて呉れ。裏に、亡き娘に歸り來れと傳へて呉れ。

暮れ難き夏の日暮しながらむればその事となく物ぞ悲しき

〔歌意〕 暮れるに遅い夏の終日、つれづれと物を思つて居ると、其の事として思ひ出す事も無いが、何となく物悲しい。

註。

行く螢雲の上まで——後撰和歌集秋上に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

暮れ難き夏の日暮し——續古今和歌集夏歌に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

四十六段

昔、或る男が、まことに善い友達を持つて居た。暫しの間も離れ難いやうに思ひ合つて居たが、その友達は京都から地方へ赴任する事となつたので、名残惜しく思つて別れた。幾月かを經て、任地から言つてよこした手紙の文句に、

怪しからずもお目にかゝる事が出來ずに、久しい月日がたちましたよ。それまでの事を思ふと、我と驚かれるやうな變化ではありません。今はもうわたしといふ者を忘れてしまはれたの

で無いかと思つて、せん方もなくて居ます。それは世間の人の氣持といふものは、目のあたり逢つて居ないと忘れてしまふものでせうから。と言つて來たので、男が返事に、歌を詠んで遣つた。

目離るとも思ほえなくに忘らるゝ時しなければ面影にたつ

〔歌意〕 あなたは、眼離れてしまつた、逢はないと言はれるが、わたしはさうは思ひません。それ所では無く、わたしはあなたを忘れるといふ時が無いので、あなたの面影が眼の前に立ち通しです。

註。

目離るとも思ほえなくに——古今和歌六帖第四に、同じ歌がある。作者は業平となつて居る。

四十七段

昔、或る男、何うぞして逢ひたいものと深くも思ひ慕ふ女があつたが、女は、此の男を浮氣者だと聞いて、末を案じて、言ひ寄つても唯すげない様子を重ねるばかり、應じろらしくも無かつた。その女から男によこした歌。

大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ

〔歌意〕 大幣のやうにあなたは、引く手即ち誘ふ女が大勢な人と變つてしまつたので、私は思つてはゐるけれども、十分には何うにも頼みにされないことだ。

男はそれに返し歌をした。

大幣と名にこそ立てれ流れても終に寄る瀬はありてふものを

〔歌意〕 大幣といふ評判は、専らに立つてなれ、その大幣の流れては行つても、果は懸り留まる浅瀬はあるといふことであるに。

註。

大幣の引く手あまたに——古今和歌集戀歌四に、同じ歌がある。讀人しらす。
大幣と名にこそ立てれ——古今和歌集戀歌四に、前歌の「かへし」として、同じ歌がある。作者
はなりひらの朝臣となつて居る。

四十八段

昔、或る男があつた。旅立ちする知人に餞別を贈らうと思つて、其の人の來るのを待つて居
たが、他に廻る所が多いのか、中々やつて來ない待ち遠しさに、斯ういふ歌を詠んだ。

今ぞ知る苦しきものと人待たん里をば離れず訪ふべかりけり

〔歌意〕 今こそわたしも、待つ身の苦しさを思ひ知つた。此れ程であるならば、待つは苦しいも
のと言つて、女の待つて居たらう所の里を、無沙汰をせず尋ねてやるべきであつた。

註。

今ぞ知る苦しきものと——古今和歌集離歌下に、同じ歌がある。作者はなりひらの朝臣となつて
居る。

四十九段

昔、或る男が、——美しい容姿をしみじみ見て居ると、——ふと、一人
の美しい女を見て居るやうな氣が起つて、

うら若み寝好げに見ゆる若草を人の結ばんことをしぞ思ふ

〔歌意〕 うら若さに、ねよげに見える若草を誰かが我が物として結び合はせるのであらう事が思
ひやられる。——美しく、——を、誰が自分の物とするのであら
う、嫉ましい氣がする。「寝好げ」は、——の意と、根がよささうといふ意との懸詞
で、又「若草」の縁語となつて居る。「若草」は夫婦の譬によく用ひられるもの。

返し歌。

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな

〔歌意〕 僅かに萌えた初草のやうにも、めづらしい言葉を開く事ではありますよ、なぜ又そんな戀ひめかしい事を言はれるのですか。わたしはそんな御心があらうとは思ひも懸けず、——
——距てなく思ひまゐらせて居た事でありますに。

註。

うら若み寢好げに見ゆる——古今和歌六帖第六に、同じ歌がある。作者は業平となつて居る。

五十段

昔、或る男があつた。女がこちらの浮は氣なのを怨んで來ると、そなたこそと怨みかへして、
鳥の卵を十づつ十は重ぬとも思はぬ人を思ふものかは

〔歌意〕 鶉の卵を百も重ねるやうな事が出来るにしても、思つて呉れない人の心がどうして頼まれよう、如何なる事にも増して人の心は頼まれない。

と言つたので、女は、

朝露は消え残りてもありぬべし誰か此の世を頼み果つべき

〔歌意〕 晝の光に逢ふと残らず消えてしまふあの朝の露も、或ひは消え残るのもあるかも知れない。其の消え残つた露を思ひやるよりも、もつと頼み難いのは男心である。如何なる人が、男女の仲を終りまで頼み得た者があらうか、恐らくは一人も無いであらう。

又、男が詠んでやる。

吹く風に去年の櫻は散らずともあな頼み難人の心は

〔歌意〕 吹き來る風に、去年の櫻が、その散りやすいのを散らすに、今年まで残つて居た。さういふ頼み難い事を頼むよりも、あゝ頼み難いは人の心である。

又、女は其の歌の返しをする。

行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

〔歌意〕 流れ行く水の上に、數を數へる爲の字を書いて數へようとす。その役に立たない事よりも一層役に立たないのは、思つて呉れない人を、こちらでばかり思ふ事である。

又、男が詠んでやる。

行く水を過ぐる齡と散る花といづれ待ててふ事を聞くらん

〔歌意〕 流れ行く水といひ、過ぎて行く齡といひ、さては散つて行く花といひ、皆、暫し待てといつたとて聞かないものである。其のやうに、思つて呉れない人を、こちらで思へといつたとて聞き入れようか、聞き入れるものではない。

かうして、互に自棄になつて、浮は氣競べをする男女である。定めて負けては居ずに、忍び歩きをした事であらう。

註。

鳥の卵を十づつ十は——古今和歌六帖第四に、下旬を「人の心を如何たのまむ」として、作者は紀友則となつて居る。

朝露は消え残りても——續後拾遺集哀傷歌に、同じ歌がある。讀人しらす。

吹く風に去年の櫻は——古今和歌六帖第四に、「散らすして去年の櫻はありぬとも人の心ないかゝたのまむ」とある。作者は在原滋春となつて居る。

行く水に數かくよりも——古今和歌集戀歌に、同じ歌がある。讀人しらす。

五十一段

昔、或る男があつて、或る人が其の家の前栽へ菊を植ゑたのを見て詠んだ。

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや

〔歌意〕 植ゑてさへおけば、秋のないといふ時があれば、咲かなからうが、さういふ時はない。咲く花は散りもしよう。根までも枯れようか、根は枯ればしない。

註。

前栽——庭前に草木を植ふた所の稱。後園にしての名。
植ふし植ふば秋なき時や——古今和歌集秋歌下に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

五十二段

昔、或る男があつた。人の所から飾かざり粽ちまきをよこした。其の返事に、

菖蒲刈り君は沼にぞ感ひける我は野に出でて狩るぞわびしき

〔歌意〕 あやめを刈ると、君はあちこちの沼を感ひ歩いて難儀をされた事であらう。わたしは又野に出て、雉を狩らうと、もとめ侘びた。(「刈り」「狩る」は同音の語を對稱させて居る。)と言つて、雉を遣つた。

註。

飾粽——五月五日の節供の粽を、五色の絲で括つて飾つたもの。

五十三段

昔、或る男、逢ひ難いなが中の女にたまく逢つて、何くれと積る思ひを話して居る中に、早くも鶏が啼いて夜明けとなつたので、

いかでかは鶏の鳴くらん人知れず思ふ心はまだ夜深きに

〔歌意〕 なぜ斯う鶏が啼くのであらう。人に知られず思ふ心もちからは、曉どころでは無い、まだ夜が深いやうに思つて居るのに。

註。

いかでかは鶏の鳴くらん——續後撰和歌集戀歌三に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居

五十四段

昔、或る男、逢はうとも言はない無情な女の所へ言つて遣つた。

行きやらぬ夢路を辿る袂には天津空なる露や置くらん

〔歌意〕 現には逢ふすが無いので、魂は、せめて夢の中になりとも逢はうと思つて、あなたの方へ出て行くのであらうが、それさへも相思ふ仲では無いので、あなたの所へは行かれず、夢の路ばかり辿つて居るので、其の辿つて居る衣の袂に、空の露が置いたのであらう。

註。

行きやらぬ夢路を——後撰和歌集戀歌一に、「ゆきやらぬ夢路に恋ふ袂には天津空なき露ぞおきける」とある。讀人しらす。

五十五段

昔、或る男、思ひを懸けた女ではあつたが、もうとても、我が物としては得られないものとなつてしまつた時に、

思はずはありもすらめど言の葉の折節毎に頼まるゝかな

〔歌意〕 あなたは、私といふものを、もう思つては居なからうけれど、をりふし毎の言葉——女の何等かの機會に言ふ言葉毎に、それでもまだ思つて居るのでは無いかと心に頼まれる事よ。

註。

思はずはありもすらめど——續後撰和歌集戀歌三に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

五十六段

昔、或る男、寝ても思ひ、起きても思ひ、思ひ餘つて詠んだ歌。

我が袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり

〔歌意〕 我が袖は、草の庵では無いが、丁度そのやうに夕暮になると、露の置き所のやうにも、繁くも涙に濡れる。——草の庵は、露が繁く置くやうに見える所から。

註。

我が袖は草の庵に——新勅撰和歌集雜歌二、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

五十七段

昔、或る男、深くも人目を忍んだ物思ひをした。その男が、思ひに堪へずして、無情い仕打ばかり見せる女の許に言つて遣つた。

戀ひわびぬ蟹の刈る藻に宿るてふわれから身をも碎きつるかな

〔歌意〕 あなたに戀ひこがれて、せんかたなき思ひばかりした。それは、海人の刈る所の藻に住んで居るわれからといふ蟲、その蟲の、われからといふ通り、わたしも亦、唯自身の心から、心も、身も思ひに碎いてしまつた事ではある。(二三句は「われから」といふ爲の序)

註。

新勅撰和歌集戀歌二に、同じ歌がある。讀人しらす。

五十八段

昔、うはくとして色好みの男があつた。山城の長岡といふ處に、家造つて住んで居た。

その家の隣に、親王方の邸があつて、可なりに見られる女共が宮仕へして居た。其處は田舎の事であつたので、浮氣者の男は、自分で田の稻を刈らうとして出て居た。その様を隣の女共が見付けて、あのまあ粹な方があんな事をして、とその似合はしくないのをからかつて、大勢が集まつて、押しかけて来るので、男は避易して、家へ逃げ込んで、奥の方へ隠れてしまふと、女共は今度は歌を詠んでからかつた。

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけん人のおとづれもせぬ

〔歌意〕 荒れ果てたことよ。ああ、このやうにしていかに久しくなつた宿なのであらうか、以前住んでゐたらう人の音づれをした跡さへも見えない。——男の出て来ないのをからかふ心から。

と言つて、集まつて入つて来て居る。早速には出て行かないので、男が返し歌をした。

菘生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり

〔歌意〕 如何にも家は荒れて、菘が生えるやうになつてしまつた。が、さうなつた事によつて恐

はしいのは、人氣の無いのを幸ひに、かう、かりそめにも鬼どもの多く集まつて来るといふ事である。(「鬼」は女を暗示したもの。即ち、鬼は必ずしも悪形のみでなく却つて美女の姿などもした。)

と奥の方から言ひ出した。と今度は女どもはまた向きを變へて、あなたが田を刈るなら、わたし共お手傳ひに落ち穂を拾ひませう、といふので、男は、

うち佗びて落穂拾ふと聞かませば我も田づらに行かましものを

〔歌意〕 世に在り佗びて、落ち穂を拾つて暮すとも聞いたならば、わたしも田面へ出て、一しよに落ち穂を拾ひませうが。——からかひば眞平です。

と言ひ返した。

註。

荒れにけりあはれ幾世の——古今和歌集雜歌下に、同じ歌がある。讀人しらす。

五十九段

昔、或る男、京の生活を何う観じたのであらうか、東山に隠れ住まうと思ひ込んで、

住みわびぬ今は限りと山里に身を隠すべき宿求めてん

〔歌意〕 世の中に住み侘びた、豫れてさうした時には、山里に身を隠さうと思つて居たが、今は我が身もその限りとなつた。いよ／＼さうと極めて、其の家を求めよう。

と思つた。さうかうして居る内に、何といふ事も無く重い病氣をして、氣絶してしまつたので、顔に水など懸けると、息を吹きかへした。

我が上に露ぞ置くなる天の河とわたる舟の櫂の雫か

〔歌意〕 我が顔の上に露が懸つた。既に死んだと思つた身の、さうした事は、天上の天の川を急いで渡る彦星の舟の、その棹のしづくの落ちて來たのか。〔とわたる〕は、一つの語。疾渡るで、

急いで渡る意。〕とは、又、門即川門の意で。天の川の縁語。〕
と詠んで、生き返つて來た。

註。

住みわびぬ今は限りと——後撰和歌集雜歌一に、四句が「つま木こるべき」となつて、作者は樂平朝臣となつて居る。

我が上に露ぞ置くなる——古今和歌集雜歌上に、同じ歌がある。讀人しらす。

六十段

昔、或る男があつた。官人であつて、奉仕が忙しい爲め、自然家の方はおろそかになつて、妻と懇に物を言ひ合ふといふやうな事も少かつたので、妻はそれを飽き足らず思つたのであらう、他の男で、眞實を盡くしてやらうといふ人を頼みにして前の男を棄て、地方へ附いて行

つてしまった。さて以前の男は、豊前の宇佐の八幡へ、勅使として代参する役を蒙つて、京を立つてそちらへ行くと、其の女は、或る國の、勅使を馳走するべき役に當つて居る官人の妻になつて居るといふ事を聞き込んだので、其の家へ行つて、饗應を受ける事になつた時、勅使の男は、此の家の女主人に酒の取持を頼まう、さも無くば酒も飲むまいと言ふので、官人は妻を呼んで、言はれる儘に、妻に盃を取らして、勅使に差させると、勅使は酒の肴になつて居る橋を取つて、其の女主人に歌を詠みかけた。

五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

〔歌意〕 五月を待つて咲く花橋の香をかぐと、さながらに以前關係のあつた人の袖の香がする。——物に附けては昔戀しい。「花橋」は、橋を、その花を賞するについていふ語。橋は夏蜜柑の一種。

と言つたので、妻は、以前の自分の輕はづみな事を思ひ出して、悔いて、尼になつて山へ入つてしまった。

註。

五月待つ花橋の——古今和歌集夏歌に、同じ歌がある。讀人しらす。

六十一段

昔、或る男が、京から遠い筑紫の國まで行つた。とある家の前を通ると、その家の女が、その男を見て、この人は色を好む人よ、好色者よと簾の中から言ふのを聞いて、歌を詠んで言ひ返した。

染川を渡らん人のいかでかは色になるてふことのなからん

〔歌意〕 こゝへ来るに渡つて来た染川、染川といふ川を渡る人の、いかで、色に染まぬといふ筈があらう。當り前である。わたしは好まないが、染川が色に染めるのである。

女が其れに返し歌をする。

名にし負はばあだにぞあるべきたはれ島浪の濡衣著るといふなり

〔歌意〕 染川が色に染めると言はれるが、若し名を負つて其の通りであるならば、たはれ島といふ名のこの島も、戯れた、浮氣な島でなくてはならない。が其れは濡れ衣ぬれぎぬを著たので、戯れた島では無いと人が言つて居る。(「濡衣」は「浪」の縁語。)

註。

染川を渡らん人の——拾遺和歌集雄戀歌に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。名にし負はばあだにぞあるべき——後撰和歌集壽旅歌に、第二句「あだにぞ思ふ」終句「いく世きつらむ」となつて居る。讀人しらす。

六十二段

昔、或る男、幾年かの間手に懸けて居た女があつたが、仔細があつて男は暫く通ふ事が出来

ずに居た。と其の女は、賢くは無かつたのであらう、他の人から、斯うして心細くして居るよ
り、田舎へ行つた方がましだらうなど、確かでも無い事を言はれると、直ぐに其の氣になつ
て、地方へ行つて、その家に召し使はれる下婢となつてしまつた。そして以前通つて居た男
が、たま／＼其の家へ行くと食物くひものの給仕などに出て來た。其の夜、男は主人に、昨夜ゆうべ給仕に出
たあの女を、わたしの所へよこして下さいと言ふと、主人は言はれる儘に客の所へよこした。
と客の男は女に對つて、わたしを見忘れたのか、某だと言つて、歌を詠みかけた。

古のにはひはいづちち櫻花こけるがごともなりにけるかな

〔歌意〕 以前のあの艶あややかであつた顔いろは、どこへ行つてしまつたのか。丁度櫻の花の散つて
色の無いものとなつてしまつた。そのやうにも成らせた事であるよ。

と言ふに、女は如何にも男に對して恥づかしく、返事も出来なくて居ると、男は疊みかけ
て、なぜ返事もしないのだと聞くので、女は、涙のこぼれますので、眼も見えなければ、物も
言はれないのですと言ふ。と男は又歌みかけた。

これやこの我にあふみを遁れつゝ年月経れどまさり顔無み

〔歌意〕此の人があの、わたしに逢ふ事を避けて脱れて行つて、その後幾多の年月は立つたが、つれなきの直らうともしない。

と言つて、自分の著て居た著物を脱いで與へたが、女は其の著物も棄て、其の場に居たたまらず逃げて行つた。そして何處へ行つてしまつたのか分らなくなつた。

六十三段

昔、好色のぬけない老女があつた。どうにかして、人情を解する男に逢ひたいものだと思は思つて居たが、それと言ひ出すついででも無いので、考へた末、本當でも無い夢の話を拵へて、それを三人の男の子を集めて聞かせて、夢合はせをさせようとした。長男と次男とは、思ひやりの無い返事をして其れぎりにしたが、三郎である子は、母の察せよがしに話す夢語りの

心を察して、それはよい男がお出来になるといふ兆でせうと夢を合はせたので、母の老女はひどく嬉しい様子であつた。さて、三郎は、よい男といふ中でも、在五中將に較べると外の男は、較べ物にもならない程情けが遅れて居る。あの方が第一の譯知である、何うぞして彼の在五中將に逢はせてやりたいと思ふ心持があつた。三郎はふと、中將が狩に出た途中で行き合つた。よい折と、下人のするやうに中將の馬の口を取つて控へて、母の夢、自分の夢合はせの事、それに就て思つた事など話すと、中將は老女の心をあはれに思つて、其の夜、其の家へ行つた。が一夜行つたぎり、其の後は男が來ないので、老女は戀ひしがつて、男の家の邊へ行つてさまよつて、男を垣間見た。それを男も亦ほのかに見て、歌を詠んだ。

百年に一年たらぬつくも髮我を戀ふらし面影に見ゆ

〔歌意〕百年に一年足りない——ひどく老いたつくも髮の姫よ。その面影が眼の前に浮かんで見える。わたしを戀しがつて居るのであらう。

と言つて、下人に命じて馬に鞍を置かせて、外へ出懸けるらしい様子なのを見て、老女はて

つきり自分の所へ通つて來られるのだと思つて、それならば、急いで家へ歸つて居ようと、家までの路を、茨、枯穀の見さかひも無く、其の中を夢中に走つて家へ歸つて來て臥して居た。男は、前に老女のしたやうに、家の外に忍んで立つて垣間見ると、老女は打ち嘆いて、さて寢ようとして歌を詠んだ。

さむしろに衣片敷き今夜もや戀しき人にあはでのみ寢ん

〔歌意〕 寢の上にひとり寢をして。今夜も亦。戀ひしい人に逢はないまゝに寢るのであらうか。

と詠んだので、男はあはれに感じて、その夜は其の家に寢た。世の中の通例として、美しく若いのを好き、年寄つた醜いのを嫌ふものであるが、此の中將ばかりは、さうした差別を見せない情け心があつた。

註。

在五中將——在原業平。

つくも——水藻。江浦草。老女の短く亂れがちの髪に似た所から、譬喩に用ひられて居る。

さむしろに衣片敷 ——古今和歌集戀歌四に、下句が「我をまつらむ宇治のはし姫」となつて居る。讀人しらす。

六十四段

昔、或る男、或る女から手紙をもらつたが、唯それだけで、女は忍んで逢はうともしず、のみならず、どこの誰とも、一切を隠してあつて分からないので、男は怪しく思つて、かうした歌を詠んだ。

吹く風に我が身をなさば玉簾ひまもとめつゝ入るべきものを

〔歌意〕 わたしの身を、かの形の無い風とする事が出来るならば、かの玉簾の隙から吹いて入らうものを。——そして、あなたは誰であるか捜さうものを。

女からの返し歌があつた。

とりとめぬ風にはありとも玉簾誰が許さばか隙もとむべき

〔歌意〕よしや手に取りとめられぬ風であつても、玉簾の中へは、誰の許して、隙を求めて入る事が出来よう。そんな事は出来ない。

註。

吹く風に我が身をなさば——新千載和歌集戀歌二に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

六十五段

昔、

召使はせられる宮女で、特に禁色の衣を着るを許されたのがあつた。其の女は帝の御生母、大御息所であらせられた方とは、従姉妹といふ間柄にあつた。其の女、當時殿上に伺候して居た在原姓の少年と相知る中となつた。さて此の男は、未だ少年の身

であるといふので、宮女達の室への出入りを許るされて居たので、それをよい事にして、其の女の居間へばかり行つて、いつも對ひ合つて居るので、女は、人目を憚かつて、こんなにして居ては、如何にも見苦しい、此の儘に續けて居ると、わたしばかりではなく、そなたの身も破滅するでせう、此んな事はなさると諫めると男は歌を詠んだ。

思ふには忍ぶる事ぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

〔歌意〕思ふといふ事には、相手に見せまいと忍ぶ事の方が負けてしまつた事である。身の破滅と言はれるが、逢ふといふ事の代償ならば、身は破滅してもよい。まゝよ。

と言つて聞かないので、女は呆れて、曹子へ下つて来て居ると、男はこちらの方へは、一層人目を忍ぶ必要も少ないので、大びらに上つて来てばかり居るので、女は思案も盡きて、里へ下つて行つた。さうすると男は、何の其れが、もつけの幸と、今度はそちらへ繁く通つて行くので、事情を知つて居る者の者は、其れを聞いてをかしがつて笑つた。さて男は、夜は女の里へ行つて朝になると宮殿へ歸つて来て、夜、宿直をして居たらしく装ふ爲に、そこには朝の掃

除をする者を監督する主殿寮の見て居るのもかまはず、自分で穿いて来た沓を、奥の方の、宿直の者の沓を置く所に投げ入れては殿上に昇つて行つた。斯ういふ風に、見苦しい事をしつめて居ると、當然身も徒らになるべきであるが、男も自然それに氣が附いて、此の儘で進むと終には女も自身も身の破滅を招くであらうと思つて来た。其れには何うしたならばよからう、所詮は神佛の廣大な力に縋つて、斯うした心を止めて戴くより他は無いと思つて、祈禱を籠めて見た。が止めようと思へば思ふ程、其の思ひは一層増さつて行くやうに思はれるばかり、猶、せん方なく戀ひしく思はれるので、更に陰陽師、神巫などと呼んで、戀の病を祓ふ、その祓ひの品を持つて、鴨河へと出かけた。さて祓ひの式をしてしまふと、此れを限りと思ふと共に、復も戀しさの情が數々加はつて来て、前よりも一入戀しい氣のするので、

戀せじと御手洗河にせし禊神はうけずもなりにけるかな

〔歌意〕戀をしまいと思つて、祈の爲に、みたらし川に禊をした。その祈は。今になつて見ると、神の納受しないものとなつてしまつた。戀は止まない事である。(「御手洗川」は、普通名詞。神

に近づく者の身を清める川。)

と言つた。

御顔も形も美しくおはす方で、曉毎

に、佛名を一心になつて唱へさせるのを例とせられたが、其の御聲はいかにも尊く、洩れ聞いて居ると身に染みるやうなので、宮女はよよと泣いた。それは、斯うした尊い君に心から仕へまつる事の出来ないといふのは、前世の因縁の拙い爲であつて、悲しい事ではある。それも宿縁とは言ひながらこの男に引き留められてと言つて泣いた。さうして居る中に、

男の方は配流に處されたので、女の方は、その従姉である大御息所が、然るべく扱はうと言つて、宮中から退出させて、里の殿の、倉の中に閉ぢ籠めて、懲らしめたので、女は倉の中に籠もつて泣いて居る。そして、

蟹の刈る藻に棲む蟲の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ

〔歌意〕我が心故にこそ起つたことと思つて、聲を立てて泣かう。更々人は恨むまい。(一二句は「われから」に懸る序。)

と歌つて、泣き暮して居ると、男は、その配所が京からほど近い所にあつたと見えて、毎夜女の閉ぢ籠められて居るあたりへ忍んで来て、それと女に知らせよう、あはよくば女に逢ひたいものと、笛をおもしろく吹き、聲もつくろつてあはれ深く歌をうたつた。斯ういふ風であつたので、女は倉に籠められながら、男がそこに居るとは聞き知つたものゝ、さて逢ふ方法も無いので、歌を詠んだ。

さりともと思ふらんこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして

〔歌意〕 忍んで来てもいつも逢へないが、それでもいつかは逢へようかと思ひ給ふのであらうが、それが悲しい。われは斯うして倉に閉ぢ籠められて、あつても、無いと同じやうな身であるのに、それとも知り給はずに。

と心の中で思つて居た。男は、女に逢ひ寄ることが出来ないので、こんなにして笛を吹いてさまよひながら、配所へ歸つてはこのやうに歌つて居る。

いたづらに行きては來ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

〔歌意〕 無駄に、行くばかりで、歸つて來るだけの女によつて、見たいと思ふ心に誘はれ誘はれする。

。従つて、大御息所も染殿后でありま
す。或ひは五條后だとも申します。

註。

思ふには忍ぶる事ぞ——古今和歌集戀歌一に、下句が「色には出じと思ひしものを」となつて居る。讀人しらす。又、同集の戀歌二に「命やは何ぞは露のあだ物をあふにしかへば惜しからなくに」とある。ともりの。兩歌の上半と下半との意を一つにした歌。

戀せじと御手洗河に——古今和歌集戀歌一に、終句が「なりにけらしも」となつて居る。讀人しらす。

疊の刈る藻に棲む蟲の——古今和歌集戀歌五に、同じ歌がある。作者は典侍藤原直子朝臣となつて居る。

さりともと思ふらんこそ——新勅撰和歌集戀歌四に、同じ歌がある。讀人しらす。
いたづらに行きては來ぬる——古今和歌集戀歌三に、同じ歌がある。讀人しらす。

六十六段

昔、或る男、攝津の國に知行所があるので、兄、弟、友達などを連れて、そこへ遊びに行かうと、難波のあたりへ行つた。海を見ると、渚に船が多く繋がれてあつたが、それを見て一首を詠んだ。

難波津を今朝こそみつの浦毎にこれや此の世をうみ渡る舟

〔歌意〕 名高い難波の港を今朝こそ見たが、其の難波津の御津の浦毎に浮いてゐる多くの船がある。其の船の大きく小さく、後れ先立つ様、これや我ひとの此の憂き世の中を倦み渡る様でもあらう。(「みつ」は、見つと御津、「うみ」は、海と倦みの懸詞。)

註。

難波津を今朝こそみつの——後撰和歌集雜歌三に、二句が「けふこそみつの」とある。作者は業

平朝臣となつて居る。

六十七段

昔、或る男、逍遙をしようと、親しい同志を引き連れて、和泉の國へ二月頃に行つた。途中、河内の國の伊駒山を眺めると、山上は曇つたり晴れたりして、昇りつ沈みつして雲は動きやまない。朝から曇つて晝になつて晴れた。ふと見ると、それは雪の降つたので、木々の梢は眞白になつて居た。其の雪の降つたのを見て、かの一行の中の唯一人だけ歌を詠んだ。

昨日今日雲の起ち舞ひかくろふは花の林を憂しとなりけり

〔歌意〕 昨日今日、雲が立ちまよつて山を隠すのは、時ならぬ花の林の美しさを人に見られるのが妬ましく、憂いからである。

六十八段

昔、或る男、和泉の國へ行つた。途中、攝津の國の、住吉の郡、住吉の里、住吉の濱を行くと、その眺望がおもしろいので、乗つて居た馬から下りて、飽かず眺めながら行つた。と、或る人が、住吉の濱を歌に詠めと言ふので、

鴈鳴きて菊の花咲く秋はあれど春の海邊に住吉の濱

〔歌意〕 鴈が啼いて、菊の花も咲くおもしろい秋の季節もあるが、それも春の海濱のおもしろさには及ばない。げにおもしろい住吉の濱よ。

と詠んだので、其の歌に感心して他の者は詠まなひでしまつた。

六十九段

昔、或る男があつた。その男が、勅命を蒙つて、伊勢の國へ狩の使に行つたが、其の時の齋の宮である親御の方が、此の男とはゆかりのある所から、手紙を以て、いつもの狩の使よりは、此の度の使は大事にするやうに言つてやつた。かうした親御の命令である所から、齋の宮は大層懇ろに持成した。さて朝は心を附けて狩りに出してやり、夜は格別に自らの殿へ歸らせるやうにした。かういふ風に懇ろに、大切に持成して居るうちに、二人の心は相寄つていつた。そして二日目の夜であつた。男は無理をしても逢はうと言ひ出した。女も亦逢ふまいといふ程の心で無かつた。が、周囲の人目の繁い爲め、逢ふ事は容易で無かつた。男は正使といふ身分の人であるので、尊重して、齋の宮のをられる部屋より遠ざかつた所へは寝させなかつた。

ので、臥處へは遣入らず、何と無く外の方を眺めなどしながら、端居をして身を横にして居ると、ふと、月光の朧ろなに照らされて人影が見えて來た。眼を定めて見ると、小さな童を先へ立たせて女が立つて居た。男は無上の嬉しさに、

子の一刺

寝つかれさうにも無い

から丑の三刻まで居たが、男はまだ何事も語りもしないやうな、飽氣ない氣のする中に、——
 しまつた。男は名残惜しく、悲しく、其の夜はそれぎり寝られ
 もしなくなつた。さて翌朝になつて、男は心が結ばれては居るが、人目があるので、こちらか
 ら女の許へ消息をしてやる譯にも行かないので、あちらからよこせばよいがと思ひながら、心
 もと無く待ち遠しくして居ると、夜が明けはなれて後暫くした頃、女の方から來た。見ると、
 其の消息には文句は書いて無くて、歌だけであつた。

君や來し我れや行きけんおもほえず夢か現か現かねてかさめてか

〔歌意〕 君が來たのであつたらうか。自分が行つたのであつたらうか。思つても思ひ通り得な
 い。夢なのかそれとも現なのか。寢てゐるのか、それとも覺めてゐるのか。——一切が夢のやう
 な氣ばかりして居る。

其の歌を見て、男も胸にせまつて男泣きに泣いて詠んだ。

かき暮す心の闇にまどひにき夢うつゝとは今夜さだめよ

〔歌意〕 思ひ亂れて、心はまるで闇のやう、その闇によつて我も惑つたことであつた。夢か現か
 と言はれるが、それはこちらにも分からない。其のけじめは。今夜更に定めたまへ。

と詠んで使の小童に持たせてやつて、例の通り狩に出た。さて狩をしつゝ野は歩いて居る
 が、心は上の空にばかりなつて居て、今夜なりとも、あたりの者を寢しづまらせて、早くから
 逢つて、緩りと物を言はうと思つてゐると、あい憎にも其の夜は、伊勢の守であつて、齋宮
 の寮の頭を兼ねてゐる人が、朝廷から狩の使が下られたといふ事を聞いて、響應にとやつて來
 て、一夜中酒宴をして居るので、一向に逢ふ事が出來ない。それに、夜が明けると尾張の國へ
 行くべき日程になつてゐるので、男も女も名残惜しく、悲しく、心のうちで人知れず血の涙を
 流したが、何としても逢ふ事が出來ない。さて其の夜もやう／＼明け離れようとするに、女の
 方から送別に出す盃の下皿に、歌を書いて出してよこした。手に取つて見ると、

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば

〔歌意〕 徒歩の人の渡つて行つても濡れない程の江であれば。「えにし」に「縁を懸けたもの。」

と、上の句だけ書いて、末の句は無い。男は其の盃の下血に、松明の燃えさしの炭で、歌の末を書きついだ。

またあふ坂の關は越えなん

〔歌意〕復も逢坂の關を越えよう。——また逢ひに来よう。

と言つて、夜が明けはなれると、尾張の國へと越えて行つた。この齋宮は、清和天皇の御代にいらした御方で、文徳天皇の内親王恬子の方で、惟喬親王の御妹君であります。

註。

狩の使——鷹狩をしつゝ、兼ねて其の國の守の統治を視察する使。

齋宮——伊勢の大廟にお仕へする内親王を申し上げる。

子一つ——古昔の時刻の名で、子の時を四刻に分ち、其の第一刻。子は午後十二時より午前二時迄の間。

丑三つ——丑の時を四刻に分ち、其の第三刻。丑は午前二時より、同四時迄の間。

七十段

昔、或る男、狩の使から京へ歸る途中、伊勢の大淀のあたりに一夜泊つた。そこへ齋宮よりねぎらひの爲めの御使があつた。男は其の中にあつた童に歌を以て言ひかけた。

海松かる方やいづこそ棹さして我に教へよあまの釣舟

〔歌意〕海松のあつて刈れるあたりは何の邊であるか、釣舟に乗つてゐる海女であるそなたはよ

君や來し我れや行きけん——古今和歌集戀歌三に、同じ歌がある。讀人しらす。

かき暮す心の關に——同じく古今和歌集戀歌三に、前歌に續いて、その「かへし」として、五句が「世人さだめよ」とある。作者は業平朝臣となつて居る。

國の守——國司。一國の政務を統治した地方官。守はその長官。

齋宮のかみ——齋宮寮頭の事。

かち人の渡れど濡れぬ——古今和歌六帖第五に、同じ歌がある。

く知つて居よう。手にしてゐる棹を以て、其の邊を教へよ。裏に、逢ひまゐらせぬ、齋宮に逢ひまゐらす方法は、そなたは知つて居よう。我に教へよ。「海松かる」は、「見る目離る」の懸詞。

註。

海松かる方やいづこぞ——新古今和歌集戀歌一に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

七十一段

昔、或る男、伊勢の大廟に奉仕してをられる齋宮の許へ、宮中からの御使となつて行くと、其の御殿にお仕へして居る女房で、常日頃雅びた事を口にする女が、その勅使の所へ来て、自分の事で、歌を詠みかけた。

ちはやぶる神の忌垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに

〔歌意〕一そのこと、神の忌垣も越え、禁制も破らう、神のとがめも受けよう、都からいらつした大宮人の見たさに心魅かれて。「ちはやぶる」は「神」の枕詞。

男の返歌、

戀しくば來ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

〔歌意〕戀しいならば來ても見よ、其のやうに言ふにも及ぶまい。男女の間は、神のいましめ、とどめられた道ではないな。

註。

ちはやぶる神の忌垣も——萬葉集卷十一に、下旬が、「今は我が名の惜しげくもなし」とある。讀人しらす。又、拾遺和歌集には、「我が名」を「我が身」として、作者は柿本人麿となつて居る。

七十二段

昔、或る男、伊勢の國の或る女に、一度逢つたぎり、重ねては逢はれずに隣國へ旅立つやうになつたので、男はそれをひどく怨んだ。それに對して女の詠んだ歌。

大淀の松はつらくもあらなくに恨みてのみもかへる浪かな

〔歌意〕 伊勢の大淀に立つてゐる松は、つらい心は持つても居ないのに、其の下に寄せて來る浪は、其の松をひたすらにつらいものにして返つて行く事であるよ。(「松」は女、「浪」は男の譬。)

註。

大淀の松はつらくも——古今和歌集戀歌三に、「逢ふ事のなきさにし寄る波なればうらみてのみぞ立ち返りける」とあつて、作者はありはらの元方となつて居る。又、新古今和歌集戀歌五には、同じ歌があつて、「讀人しらす」になつて居る。

七十二段

昔、或る男、女がそこにあると、居場所も分つてゐるが、ひそかに逢ふ事も出来ないばかりか、消息さへも遣ふことの出来ない境遇に置かれてゐる女の家の邊をさまよつて、心の中で思つた。

目には見て手にはとられぬ月のうちの桂の如き君にぞありける

〔歌意〕 眼にはそれと見ながら、手に取る事が出来ない君は、丁度月の中の桂のやうでもある事よ。

註。

目には見て手にはとられぬ——萬葉集卷四に、湯原王の歌として、終句が、「妹を如何にせむ」となつて居る。

桂——月中に桂の樹があつて、高さが五百丈あるといふ傳説がある。

七十四段

昔、或る男、心變りがして、逢はなくなつてしまつた女をひどくも恨んで、歌を詠んだ。

いはねふみ重なる山は隔てねど逢はぬ日おほく戀ひわたるかな

〔歌意〕 我と君との間に、岩根を踏んで越えるやうな山の、幾つも重なつて距てゝゐるのでも無いのに、丁度そのやうに、幾日も逢へずに戀ひ渡つてゐる事であるよ。

註。

いはねふみ重なる山は——萬葉集卷十一に、「石根踏み重なる山はあらねども逢はぬ日まれみ戀ひわたるかも」とある。又、拾遺和歌集戀歌五には、坂上郎女として、「岩根ふみ重なる山はなれれども逢はぬ日まれみ戀ひや渡らむ」とある。

七十五段

昔、或る男、伊勢の國へ行つて、その女を見初めたが、そこでは逢ひ難い事情にあつたので、京へ連れて行つて逢はうと思つて、その事を女に話すと、女は、

大淀の濱に生ふてふみるからに心はなぎぬ語らはねども

〔歌意〕 餘所ながらも君と相見るので、それだけで戀しい心も和いでなままります。直接にお逢ひして語らふことはしなくても。——わたしは餘所ながら見まゐらせるだけで澤山です。京へは行きますまい。(一二句は、大淀の濱に生えてゐる海松の意で、「見る」の序となつて居る)。

と詠んで、以前もつれなかつたが、それにもましてつれなくなつたので、男は、
袖ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるをあふにてやまんとやする

〔歌意〕そなたは、餘所ながら見るのを、逸ふのに思ひなして、それだけで止めようとするのか。(上半句は、波に袖を濡らしては、海人が刈つて来て干す所の海松の意で、前歌と同じく、「みる」の序。)

女は、また歌をよこす。

岩間より生ふる海松しつれなくば潮干潮満かひもありなん

〔歌意〕餘所ながら相見る事の其儘に變らずにあるならば、仰せの事は兎に角、甲斐があるといふものです。(「岩間より生ふる海松」は、岩間に生える海松を、例の「見る目」の序としたもの。「かひ」は、「潮干潮満」の縁語としての「具」と、「甲斐」との懸詞。)

又、男が詠んでやる。

涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらき心は袖のしづくか

〔歌意〕我が袖は、絞るばかりも涙に濡れてゐる。餘りにも繁き涙よ。さては、おしなべての世の中の人のつらい心持は、袖の雫となるものであるか。

世にも逢ひ難いところの女ではある。

註。

袖ぬれてあまのかりほす——新勅撰和歌集戀歌一に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。涙にぞぬれつゝしぼる——續拾遺和歌集戀歌一に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。貫之集下にも有る。

七十六段

昔、
供奉の人々に祿を賜つた。其のついでに、同じく供奉の中に加はつて居た、近衛司に奉仕して居る翁にも、御車の中から祿を賜はらせたので、翁は御禮として歌を詠んで奉つた。
時、氏神へ参詣されたが、其の時

大原や小鹽の山もけふこそは神代の事も思ひ出づらめ

〔歌意〕大原の小鹽山に鎮まします神も、今日といふ今日は、その御末なる御息所の御参詣の榮ある様を御覽になつて、御自身の神代の頃の功を思ひ出されて、甲斐ある成り行きを喜ばれるであらう。——裏に、
つる今日は、——いつもは兎に角——以前の事を思ひ出されるであらうとの意を籠めて。

と歌に託して、
だが、歌ばかりでは無く、心の中でも、今昔の感に堪へず、さぞかし悲しいと思つたであらうか、何う思つたことか、眞實の心は記者は知らない。

註。

氏神——藤原氏の氏神で、天の兒屋根の命。

大原——大原野の事で、山城國乙訓郡にあり、藤原氏の祖神である天の兒屋根の命を祭神とする春日神社を勧請してある所。この勧請は、文徳天皇の仁壽元年で、時の左大臣藤原冬嗣が、大和の春日神社は遠隔に過ぎて、婦人には詣でるに困難だとの理由からしたことである。

大原や小鹽の山も——古今和歌集雜歌上に、同じ歌がある。作者はなりひらの朝臣となつて居る。

七十七段

昔、田邑^{たむら}の帝と申す帝があらせられた。其の帝の女御に、多賀^{たが}幾子と申すがあられた。其の女御の薨じられた後の追善の法會^{ほふま}を安祥寺で營なんだ。廷臣の面々が供へ物をしたが、その數は千捧げに達する程になつた。其の多くの捧げ物を、當時の風習に従つて、木の枝に着けて、堂の前に立てたので、其の有様は、まるで山が更に堂の前へ動いて移つて來たやうに見えた。それを、右大将であつた藤原常行といふ人が、講の終つた時に、歌の詠める人達を呼び集め

て、今日の法會を題にして、春の情趣を加味した歌を詠んで奉らせた。その時、右の馬の頭であつた翁が、老の目に捧げ物を山と見違へて詠んだ。

山のみなうつりてけふにあふ事は春の別をとふとなるべし

〔歌意〕 釋尊の入寂の日のやうに、山々が皆移つて来て、今日に逢ふのは、非情のものまでも春の別れ——女御とのお別れ——を惜しんで、懇と訪つて来たのであらう。

と詠んだのを、今見ると、よいといふ歌でも無い。が昔は、此の歌が他よりは勝つて居たのであらうか、皆からおもしろがられた。

註。

田邑の帝——文德天皇。御陵の山城國葛野郡田邑にある所から、斯く呼びまゐらせた。

多賀幾子——右大臣藤原良相の女。文德實錄第二云嘉祥三年秋七月丙子朝甲子藤原朝臣多賀幾子等爲女御。三代實錄第一云天安二年十一月十四日辛未從四位下藤原朝臣多賀幾子卒。

安祥寺——山科にあり、文德天皇の御母五條后順子御建立。

藤原の常行——右大臣良相の嫡男、貞觀八年十二月十六日、右大將に任ぜらる。
 詩——法會に經文を講ずるを言ふ。
 山のみなうつりてけふに——古今和歌六帖第四に、終句が、「とふとなりける」とある。作者は業平となつて居る。

七十八段

昔、多賀幾子と申す女御がおはしました。身罷られたので、四十九日の御法事を安祥寺で行はれた。右大將で、藤原常行といふ人があられた。この方が其の法事に行かれた歸り路に、山科の禪師の親王の居られる山科の宮に參られたが、其の宮は、水を懸樋で引いて来て瀧を落とし、又、眞砂の上を水を走らせるなど、庭を趣あるやうに造らせてあつた。さて其の宮へ參つて、右大將の法親王に申されるには、年來、餘所ながらお仕へ申して居りましたが、お側近くはまだお仕へ申した事はござりませぬ。今夜はこゝで御物語など致しませうと申し上げる

と、法親王は御喜びになつて、御酒宴をするべく、夜の御座の準備をお命じになつた。さういふ譯なので、此の大將、宮の御前を下つて、お附きの者に相談されるには、宮にお仕へ申す始めに當つて、何事もせず黙つて居られようか、よつて思ふに、陛下が三條へ行幸なされた時、紀の國の者が、其の國の千里の濱にある、極めて趣きのある石を父にと献上した。ところが、遠路の事なので、其の御時の間に合はず、後になつて届いたので、甲斐もないものになつて、或る人のお部屋の前溝の中に据ゑてあるが、庭園を好ませられる親王であらせられる、あの石を獻じようと言はれて、御隨身、舍人を取りに遣はされる。幾程もなく運んで來た。其の石は、聞いたよりも見た方が優つて居た。さて、此の石を、唯此れだけで獻じるのも、面白みの無い事であらうといふので、皆の者に、それに添へる爲めの歌を詠ませた。そして右の馬の頭であつた人の作つた歌を、青苔を刻んで、細々にして、石の上へ蒔繪を施したやうな形に附けて、其の石を献上した。その歌はかういふのである。

あかねども石にぞかふる色みえぬ心をみせんよしのなければ

〔歌意〕 不十分ではあるが、岩を以て心の代りとします。それは親王を思ひ奉る心は深いが、其の心を色にあらはして御目に懸ける方法がありませんので。

註。

禪師の親王——人康親王。仁明天皇の第四皇子。貞觀元年五月入道し給ふ。法名法性。山科宮と稱す。

三條の不行幸——三代實錄に、貞觀八年三月廿八日、右大臣良相の百花亭に行幸の記あり。

御隨身——弓箭を帶して貴人の護衛に當る者で、公私の別あり。

舍人——雜使の官。

七十九段

昔、同じ氏の中からお宮仕に上つた女子の腹に皇子がお生れになつた。その御産屋の祝ひに近親の者達が賀の歌を詠んだ。その時に、皇子の母方の祖父にあたる翁の詠んだ歌。

我がかどにちひろある竹を植ゑつれば夏冬たれかかくれざるべき

〔歌意〕 我が門前に千尋の高さのある竹を植ゑたので、夏の暑い時、冬の寒い時、四時を通じて、誰か其の蔭に身を置かなからう、誰も身を置いて、幸ひを受ける事ではある。——一門の中に皇子がお生れになつたから、此れからは皆の者が、其の御蔭を蒙ることである。（ちひろある竹は、山海經に、崑崙山の北に生ずるとあり。）

この皇子は貞數親王を申し上げるのであります。當時の人は、業平朝臣の好色な所から、——皇子は業平の兄である中納言行平の女の御腹であります。

註。

氏——在原氏を指す。

御祖父——在原業平を指す。

貞數親王——清和天皇の皇子。御生母は在原行平の女。

八十段

昔、零落した家に、藤の花を植ゑて住んで居る人があつた。其の花が趣深く咲いた。三月の末つ方、春雨のそぼく降つてゐる日、其の花を折つて、目上の人へ贈つてやらうとして歌を詠んだ。

ぬれつゝぞしひて折りつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

〔歌意〕 春雨に濡れながら、折り難いのかも押し折りました。それは、美しく惜しむべき春はもう幾日も無い、その春のうちに目に懸けたいと思つたからです。

註。

ぬれつゝぞしひて折りつる——古今和歌集春歌下に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

八十一段

昔、或る左大臣があられた。京の加茂川のそば、六條の邊へ、ひどく大がかりの趣向を凝らした家造つて住んでをられた。神無月の末つ方、折柄菊の花の移らふ盛り、紅葉の濃く淡く百千の色に見える時であつた。左大臣は我が子達を其の家へお呼びよせになつて、一夜さ中、酒宴を張り、管絃の遊びをした。さて其の夜も明け離れて行く頃、此の邸宅の雅趣あるをほめる歌を人々が詠んだ。其の末座にあつた賤しい翁、板敷の下の方を這ひ歩いて居たが、人々が皆歌を詠んでしまふまで差し控へて居た後、詠んだ。

鹽竈にいつか來にけん朝風に釣する舟はこゝによらなん

〔歌意〕陸奥の鹽釜——遠く距てゝある絶景の地に、何時の間にか來たのであらう、さて其の鹽釜の、朝和ぎの海に出て釣をしてゐる海人の船よ、こゝへ寄つて來て欲しい。そして趣きを添へて欲しい。

と詠んだ。作者は陸奥の國へ行つた事があるが、そこは奇異の感のするまで趣きのある風景が多かつた。我が帝の領します日本六十餘國の中でも、その鹽釜といふ所は、他に似る所も無いまでの景色であつた。さればこそ彼の歌も、此の邸宅の景色を一入愛して、口を極めてほめる意で、「鹽釜にいつか來にけん」とは言つたのである。

註。

左の大臣——源融を指す。嵯峨天皇第十二皇子。貞觀十四年八月大納言より左大臣に任ず。年五十一。仁和三年從一位。寬平七年八月薨す。七十三。河原左大臣と號す。
家——河原院、六條坊門南、萬里小路東八丁。古今和歌集の「君まさで烟たえにし鹽がまのうらさびしくも見えわたるかな」の註に、顯昭が、「河原の院にのみじき家を造りて池をほり水をたへて潮を毎月三十石づゝくみ入て海底の魚貝等を住しめたり。陸奥國の鹽がまの浦をうつして鹽の鹽やく屋に烟をたゝせて玩ばれけると也。」と言つて居る。
板敷の下——壘を敷いた所が高く、其の次は板敷の所、又其の下、たゞの地の上の意。此處では、地位の低い意をあらはして居る。

鹽竈——陸前國宮城郡。鹽竈明神を祭る。
鹽竈にいつか來にけん——續後拾遺和歌集雜歌上に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

● 八十二段

昔、惟喬親王と申す親王がおはしました。この宮の離宮は、山崎の向うの水無瀬といふ所にあつた。年々、櫻の花の盛りの頃は、櫻を見にと其の宮へ行啓なされるのが例となつて居た。その時には右の馬の頭を、屹度、御供として連れて行かれた。——時も世も過ぎてしまつたので、右の馬の頭といふだけ、其の人の名の何といふのであるかは忘れてしまつた。さて其の離宮への行啓は、鷹狩をされるのが本意であつたのだが、そちらの方は專意にはなされず、櫻の下に集まつて、酒を酌みながら、倭歌に心を注いで居られた。さて今鷹狩にと來られた所の交野、その渚の院のほりにある櫻は、何所の櫻よりも取り分け趣が深い。でその櫻の下に、

乗つて來た所の馬から下りて、櫻の花の枝を折つて髪に挿して、そして、上、中、下、總ての者が、自分の距ても附けず、皆で歌を詠みなどした。御供の馬の頭である人の詠んだ歌。

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

〔歌意〕世の中に、若し一向に櫻の花がなかつたならば、春の季節における我が心は、落ちついて、のどかなものであらう。

と詠んだ。別の人が其の歌に返しをする。

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれうきよになにか久しかるべき

〔歌意〕そなたは櫻の散るを惜しまれるが、我は又、散ればこそ櫻の、益々結構なものに思はれる。此の憂き事の多い世に、何物か久しくとどまつて居ようぞ。櫻のいち早く散るのは、そこを知つてゐるからである。

と詠んで、さて其の櫻の下を立つて、水無瀬の離宮の方へ歸らうとすると、晝の永い日もないの間にか暮れた。をりから、此れも御供の中の者が、酒を持たせて野の方から來た。そし

て、此の酒を飲まう、同じくは景色のよい所で、うまく飲まうと、よい所を捜して行くと、天の河といふ所へ着いた。そこで新たに酒を飲む事にして、親王の御前に、馬の頭が大御酒を差上げる。と親王が仰せられるには、交野を狩りして、天の河まで来たといふ事を題にして歌を詠んで、それを肴にして盃をさせとむづかしい題を出される。馬の頭は詠んで奉つた。

狩り暮らしたなばたつめに宿からんあまの川原にわれは來にけり

〔歌意〕 今日を狩り暮して、夜は棚機つ女に宿を借りよう、天の川原に我は來たことではある。

と申し上げると、親王には此の歌を、感深く聞かれて、繰り返し、繰り返し誦された。そして其れに對する返し歌はお詠みになれない。ところが、紀の有常が、御供の中に加はつて居た、此が親王に代つて返し歌を詠む。

ひととせにひとたび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

〔歌意〕 そなたは棚機女に宿をからうと仰有るが、その天の川は、一年に一度通つて來られる君、即ち彥星を待つてゐるので、そなたに宿をかす人さへも、決してあるまいと思ふ。

と詠んだ。かくて宮は水無瀬に歸られ、離宮に入らせられた。其の夜の更けるまで、宮を始め一同は、引續いて酒を飲み、物語りをしなどして居たが、終に主人役である所の親王は、酒に酔はせられ、其の座を立つて、奥へ入らせられようとする。をりから見える十一日の月も、もはや山へ落ちようとして居るので、馬の頭は歌を詠んだ。

あかなくにまだきも月の隠るゝか山の端にげて入れずもあらなん

〔歌意〕 眺め飽かないのに、早くも月の隠れることよ、あの山の端が逃げて、月を入れずにおいてほしい、に、興が盡きないのに、早くも親王のお引込みになられることよ、御奥が逃げて、お入れ申さずにおいてほしい。

又、親王に代りまつつて、紀の有常が返し歌を詠む。

おしなべて峰もたひらになりななん山の端なくば月も入らじを

〔歌意〕 お言葉の通り、押しなべて、峰も平地となつてしまつて欲しい事である、山の端が無くなつたならば月も隠れ入る所はあるまいに。(「月」は、親王の暗示。)

註。

惟喬の親王——文德天皇第一皇子。母紀靜子、名虎の女。承和十一年誕生。貞觀十四年七月出家、法名算延。寬平九年二月薨去、御年五十四、小野宮と申す。

山崎——山城國乙訓郡。水無瀬も同所にあり。

右の馬頭——在原業平を指す。

交野——河内國交野郡。

瀨の院——惟喬親王の別墅で、河内國交野郡にあつた。

世の中に絶えて櫻の——古今和歌集春歌上に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

散ればこそいと櫻ば——古今和歌集春歌下に、残りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての憂ければ」とある。讀人しらす。

天の川——河内國交野郡（今は北河内郡）牧野村禁野にある川。

狩り暮らしたなばたつめに——古今和歌集壽旅歌に、同じ歌がある。作者はありはらの業平朝臣となつて居る。

紀の有常——紀名虎の子。

ひととせにひとたび來ます——古今和歌集壽旅歌に、前歌と並んで、同じ歌がある。作者はきのありつねとなつて居る。

あかなくにまだきも月の——古今和歌集雜歌上に、同じ歌がある。作者はなりひらの朝臣となつて居る。

おしなべて峰もたひらに——後撰和歌集雜歌三に、終句が、「月も隠れじ」とある。作者は上野峰雄となつて居る。

八十三段

昔、京より水無瀬の離宮へと通はせられた惟喬の親王、いつものやうに鷹狩にお出ましになつた、其のお供を馬の頭である翁が致した。幾日か狩を遊ばして、京の御殿へとお還りになられた。此の翁は、御殿までお送り申し上げて、さて早くお暇を賜つて家に歸らうと思ふと、親王は御酒を下されたり、褒美を與へようとお言ひになつて、中々お暇を戴けない。いつもなら

當然お暇を下されさうな場合である、それに其の御氣色みけしよも無い、のみならず、名残惜し氣にさへなされるやうに見上げられる、此れには何等かの仔細があるのでは無いか、と不安な感がするるので、馬の頭が歌に詠んだ。

枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

〔歌意〕 枕にするとして、野にある草を引き結んで、そして旅の夜の假り寝をする、その假寝をもしまい。短いは春の夜の習ひ、秋の夜の長さのあるものと思つて、氣を許して寝る事さへ出来ないので。——短夜である起き明かしてお仕へ申さう、と表には言つて、裏には御氣色みけしよを拜むと、うっかりは寝られもしない、何か有りさうだといふ心もとない感を含ませて。

と詠んだ。其れは三月の下旬なのであつた。親王は、御寢所にもお入りにならずに起き明された。馬の頭うまのかぶは斯ういふ風にしつゝも、御殿に奉仕して居たのであるが、親王は思ひがけずも御落飾をなされてしまはれた。そして御殿を棄てさせられて、小野といふ所へ移つて住ませられた。さて其の後、馬の頭うまのかぶは正月の御禮言上に、親王にお目に懸らうと思つて参つたに、其の小野は比叡山の麓にあたつてゐるので、雪が深くも埋めてゐる。其の雪を無理に踏み分けて、

御室みむろにまるつて、お目に懸つた所、親王には、無聊な御様子で、何となく悲しげな御様子であるので、お暇を戴く氣にもなれず、稍々久しい間、御前に居て、昔の事、今の事と、思ひ出すまゝに物語など申し上げた。さうする程、馬の頭うまのかぶは心残りがされて、さても此の儘ままに留つて、お仕へ申したいものだと思つたが、思ふにも任せない公の役目も帯びてゐる身なので、何時までも御前にをる事も叶はず、夕暮になるとお別れをして京へ歸らうとして詠んだ。

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは

〔歌意〕 ふと忘れた時には、一の親王として時めかせ給ひし御身の、斯うしたお姿に變らせられたのを夢であるかと思ふ。其の當時、何で思つたことであらうか、思ひだにしなかつた。山の深い雪を踏み分けて、君を拜みまゐらせるといふやうな事は。

と詠んで、名残を惜しみながら、泣く泣く京へ歸つた。

註。

枕とて草ひきむすぶ——古今和歌六帖第四に、第二句「草結ぶてふ」とある。作者は小町となつ

て居る。

御髪おろし給うて——三代實錄に、「貞觀十四年七月十一日、四品彈正尹惟喬親王、寢病、頓出家、爲沙門」とある。時に御年二十九。

小野——山城國葛野郡小野郷。

忘れては夢かと思ふ——古今和歌集雜歌下に、同じ歌がある。作者はなりひらの朝臣となつて居る。

八十四段

昔、或る男があつた。官位は低かつたけれども、母は實に内親王であつた。その母は長岡といふ所に住んで居られた。子は京へ行つて朝廷へ仕へてゐたので、御機嫌伺ひに歸るやうにはしたが、公事に支へられて度々は歸られなかつた。それに又母には唯一人の子でさへあつたので、この上なく愛して居られた。さうしてゐる中に、十二月頃に、急な用事だとなつて、母から手紙が來た。何事だらうと子は驚いて披いて見ると、別に言葉書きは無く、歌ばかり書いてあつた。

てあつた。

老いぬればさらぬ別のありといへばいよ／＼みま／＼ほしき君かな

〔歌意〕 年寄になると、死別といふものがあるといふので、ますます逢ひたくなつた御身であるよ。

とあるのを見て、子は、母の心を察して、烈しくも泣いて歌を詠んだ。

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため

〔歌意〕 世の中に、死別といふものがなくてほしいことである。千年の齡をとお祈りしてゐる子の爲に。

註。

宮——三代實錄に、「貞觀三年九月十九日庚寅、無品伊登内親王薨、帝不視事三月、内親王桓武天皇之皇女也、母藤原氏、從三位乙叡之女也」とある。その内親王である。又、三代實錄に、「阿保

「親王娶伊登内親王生業平」とある。

長岡——山城國乙訓郡で、京都よりは一里内外。延暦三年、奈良から一旦遷都され、更に京都へ遷都されたのであるから、舊都の地である。

老いぬればさらぬ別の——古今和歌集雑歌上に、業平の朝臣の母のみこ、長岡にすみ侍りける時に、業平宮仕すとて、時々もえまかりとはす侍りければ、しばすばかりに、母のみこの許より、とみの事とて文をもてまうできたり。あけて見れば詞はなくてありける歌」とある。

世の中にさらぬ別の——同じく古今和歌集雑歌上に、前歌と並んで、その「返し」として、「千代もとなげく」とある。作者はなりひらの朝臣となつて居る。

八十五段

昔、或る男があつた。其の男が幼少の頃からお仕へ申して居た御主君は、御落飾なされて、法親王となられてしまつた。それで、正月には屹度缺かさずに、年頭の拜禮を申しにお伺ひした。朝廷にお仕へをして居るので、平常は隙きが無くして伺はれなかつた。が、以前お仕へ申し

た頃の心は無くさずに、お伺ひをするのであつた。さて、正月お伺ひして見ると、以前お仕へ申して居た人達——在俗の人、法師、大勢同じ心で集まつて来て居て、正月だから、他の月とは違ふと言ふので、御酒を賜はつて飲んだ。をりしも雪が物からあけて落すやうに盛んに降つて、しかも一日中止まな。集まつてゐる限りの者は、戴いた酒に酔つて、「雪に降り籠められたり」といふ其の場の事を題にして、慰みに歌を詠んだ。例の男の詠んだ歌。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞわが心なる

〔歌意〕 いつまでも君の御側には居りたいと思ふが、宮仕への身分、身を二つに分けない限りは叶はない。お暇を戴くより爲方が無いがと思つてゐる其の眼の前に、眼も離せなく、降つては積る雪、其の雲の道を埋めて歸れなくして呉れるのは、我が本懐とする所である。

と詠むと、親王には其の歌をこよなく愛でられて、召してをられた御衣を脱いで褒美に賜はつた。

註。

思へども身をしわければ——古今和歌集離別歌に、第三句以下「目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる」とあり、古今和歌六帖第一には、第四句「雪のとむるぞ」とある。

八十六段

昔、或る若い男が、若い女に、契らうと言ひ寄つた。が双方とも親があつて、承知して呉れさうも無かつたので、胸に包み合つて、それと思ふばかり、言ひさした儘になつて中絶して居た。それから幾年かしてである。今度は女の方から、なほも昔の戀を遂げようと言ひ寄つて来たものであらうか、男は、歌を詠んで返事をした。

今までに忘れぬ人は世にもあらしおのがさま／＼年のへぬれば

〔歌意〕今までも前の約束を忘れなくてゐるといふ事は、世にもあるまじき事のやうに思へる。お互に、思ひ／＼の年も経て来てゐる事であれば。

と言つて遣つて、それなりに成つてしまつた。ところが、皮肉なことには、續いて男も女も同じ御殿へ奉公に出るやうになつた。

註。

今までに忘れぬ人は——古今和歌六帖第五に、同じ歌がある。

八十七段

昔、或る男、攝津の菟原郡の蘆屋の里に、知行地があるので、そこへ行つて住んだ。古歌に、葦の屋の灘の鹽やき暇なみ黄楊の小櫛もさゝず來にけり

〔歌意〕蘆屋の灘に住んで、鹽を焼くのを生業としてゐる、その生業の忙しく暇の無い爲に、黄楊の小櫛も髪にさゝず——身だしなみもしず——に、世を渡つて来たことよ。

と詠んだのは、此の里を詠んだのである。此所を蘆屋の灘と言つた。さて此の男は、生宮仕へ——ちよつとした宮仕へ——をして居たので、其れを便りにして、衛府の佐など、やはり生宮仕へをしてゐる者が、遊ばうと思つて集まつて來た。此の男の兄も衛府の督であつた。一同、男の家の前の海岸を遊んで歩いて居たが、さあ、此の山の上にあるといふ布引の瀧を見に登らうと言つて、山に登つて見ると、其の瀧は一通のものではない。その高さは二十丈、廣さは五丈ばかりある石の面を落ちて來る水のあり様は、丁度白衣を以て岩を包んだやうであつた。さうした瀧の上の所にあつて、圓坐程の大きさの石で、差し出したやうになつたのがあつた。瀧の水は其の石の上へ走りかゝつて、散つて、蜜柑か、栗の實くらゐの大きさになつてこぼれ落ちて來る。そこにゐる人の總てに、瀧の題で歌を詠ませる。彼の衛府の督が第一に詠む。

我が世をば今日か明日かと待つかひの涙の瀧といづれ高けん

〔歌意〕 老いて、行く先の短い我が世、終りの日は今日か明日かと待つ間の心細さにこぼす涙

と、此の瀧の水玉と、其の数は何方が多いのであらうか。
主人の男が次に詠む。

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくも散るか神袖のせばきに

〔歌意〕 瀧の上に誰か人が居て、踏貫いた玉を、更に抜き散らす人が、きつとあるのだらう。白玉が、絶間もなく散つて來ることよ。其れを惜しんで、袖に受けようとはするが、袖は狭くて受け切れない。

と詠んだので、一しよにゐる人達は、其の歌の拙いのををかく思つたのであらうか、此の拙い歌に花をもたせて、歌は詠まないでしまつた。さて家へ歸る事としたが、道は遠かつた。既に故人となつた宮内卿の茂能の家——存生であつたならば立ち寄つて休みもするだらうに——其の家の前を通り過ぎる時には日は暮れてしまつた。そこから我が家の方を見やると、海人の漁火が多く見えるので、彼の主人の男が歌を詠んだ。

はるゝ夜の星か河邊の螢かも我が住む方のあまのたく火か

〔歌意〕 あれば、暗夜の空に多く散らばる所の星であるか、それとも河邊に群らがる所の螢であるのか、まあ、それとも亦我が住んでゐるあたりの海人の焚く火であるのか。

と詠んで、家に歸つて來た。さて其の夜、南から風が吹いて、浪が高かつたが、夜が明けてもまだ名残の波がなか／＼高い。朝、主人の家の下婢どもが海邊へ出て、浮き海松の浪に漂つて渚に寄せられてあつたのを拾つて、家へ持ち歸つた。女房達の方から、其の海松を高杯に載せて、上に柏の葉をかぶせて差し出した。其の柏の葉に、主人は歌を詠んで書いた。

わたつ海の挿頭にさすと齋ふ藻も君が爲には惜しまざりけり

〔歌意〕 海神が、髪飾りに挿すとて、大切にしてゐる藻も、君達のためには、惜しまずに波に托して遣された。

と詠んだ。此の歌、田舎人の歌としては、言葉が餘つて居ようか、それとも足りないのであらうか。——實は、作者自身の歌なので、善いとは思つて居ながらも。

註。

葦の屋の灘の鹽やき——新古今和歌集雜歌に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。萬葉集卷三には、石川女郎歌として、志賀の海士のめかり鹽やきいとまなみくしげの小櫛とりもみなくに」とある。

兄——左衛門督在原行平を指す。

衛府——衛門府、禁中の諸門を衛り、出入を察し、時を以て巡警するを掌る官で、菅、佐、尉、志の四等に分れて、左、右、といふ。

我が世をば今日か明日かと——新古今和歌集雜歌に、同じ歌がある。作者は中納言行平となつて居る。

ぬきみだる人こそあるらし——古今和歌集雜歌に、同じ歌がある。作者はなりひらの朝臣となつて居る。

笑ふ事にやありけん——その意は、をかしく思つたのであらうか、といふのであるが、本當は、感心したのを知つて居て、態と謙遜した言葉。

はるゝ夜の星か河邊の——新古今和歌集雜歌に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

わたつ海の挿頭にさすと——古今和歌六帖第四に、第二句「かざしにさして」とある。

八十八段

昔、うら若いといふ程では無くなつた、誰れ、彼れ、友達など集まつて、月見をした。其の中ひとの一人が歌を詠んだ。

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの

〔歌意〕 大概の時には、愛すべき月を愛でまい、この月こそは、積み重なると、人間の老かと變るものである。「月」は、空の月と、年月即ち時の意と兩方を懸けてのもの。

註。

おほかたは月をもめでじ——古今和歌集雜歌上に、同じ歌がある。作者はなりひらの朝臣となつて居る。

八十九段

昔、身分の卑しくない男が、自分より身分の高い女に思ひを懸けたが、はしたなく打ち明けて言ふ事も出来ず、苦しい思ひの中に幾年かを過ぎた。さて其の男が詠んだ歌。

人知れずわれ戀ひ死なばあぢきなくいづれの神になき名おほせん

〔歌意〕 死ねばかりに人を思つてゐるのも、先には其れとも知られず戀ひ死なをしたならば、其の譯わけの分からない死なに方かたを見て、世間の人は、あれは神の祟たであなつたのだと、無益にも何れの神に、無實の名を負はせまつる事であらう。

註。

人知れずわれ戀ひ死なば——新續古今和歌集戀歌二に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

九十段

昔、或る男、言ひ寄つても、情なまけなくのみする女を、如何にもして我が物にしようと思つて、久しく戀ひ慕つて居た。女は、その心をあはれと思つたのであらうか、それでは明日、物もの越しで逢つて、物を言ふことだけはしようと言つて來たので、男は、限りなく嬉しがつたが、打つて變つた事を言ふ女の心持が、疑はしくも思はれる所から、趣ある櫻の花に歌を附けて送つた。

櫻花今日こそかくもにほふらめあなたのみがた明日の夜のこと

〔歌意〕 この櫻花、今日こそは此のやうに艶々と照つてはゐるが、もと／＼移りやすい花、明日の日まで變らずにゐるであらうか。(「櫻花」は、女の譬。)

と言つてやつたが、其の男としては、さうした心持したのであらう。

九十一段

昔、もののはれを知る男があつて、月日の過ぎ逝くをも嘆いてゐた。その男が、三月の終り、春も今日だけといふ日に、

惜しめども春の限りの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな

〔歌意〕 惜しんでも、春も今日限りだといふ日の、その日のとう／＼夕暮にもなつてしまつた事であるよ。

註。

後撰和歌集春歌下に、第三句が、「けふの又」となつて居る。讀人しらす。

九十二段

昔、或る男、懸想をしてゐる女の戀しい所から、其の女の家の邊を、幾度と無く行つたり來たりしたが、消息の文もえやらないで、嘆かしく詠んだ。

葦邊こぐ棚無小舟いくそたびゆきかへらん知る人もなみ

〔歌意〕 蘆の生ひ茂つたあたりを漕ぐ棚も無い小さい舟は、幾度ゆきかへりしても、蘆の葉に隠れて見えない故、知る人も無い。我もそのやうに、幾度君の家のあたりを行つたり來たりする事であらう、それと知る人も無く。——君に知られずに。

九十三段

昔、或る男、自分の官位は低いに、及びもつかない高い身分の女に思ひを懸けた。さうした女ではあつたが、少しは頼まれる様子があつたのもあらうか、男は、寢ては思ひ、起きては思ひ、一心に思ひつめてゐるが、さてどうともならないので、思ひわびて歌を詠んだ。

あふなく思ひはすべしなぞへなくたかきいやしき苦しかりけり

〔歌意〕 身分々に應じて、戀もするものである。匹敵もしない高い人と低い者との間の戀は、苦しいものである。

と言つた。今もさうした事はあるが、昔も亦斯うした事はあつた。身分の違ふ戀は苦しいものを知りつゝ矢張する、世間はさうしたものであらう。

註。

おふなく思ひはすべし——古今和歌六帖第五に、同じ歌がある。

九十四段

昔、男と女とあつた。契りかはして居た中であつたが、何ういふ事情でか、男は女の家へ通つて行かなくなつてしまつた。其の後女には、別の男が出来たが、前の男との間に子が出来て居たので、前の男は、以前ほど懇では無いが、時折は便りもしてよこした。さて其の女は、繪の書ける人だつたので、前の男は扇に繪を書いて呉れと言つてよこしたが、今の男が來てるからといふので、直ぐには書かず、一日二日は返して來なかつた。と前の男は、其の捨て置かれるのを口惜しく思つて、消息をした。此方の言つて遣る事を、爲て呉れないので、其れも尤もだとは思ふが、やはり其方を怨みたい氣がすると言つて、冷かして、歌を詠んで遣つた。その時は秋であつた。

秋の夜は春日忘るゝものなれや霞に霧や千重まさららん

〔歌意〕 秋になると、春は忘れてしまふものだから、現に目に見る物に引かれて、過ぎ去つた物には疎くなるのが人情だから、恐らくは過ぎ去つた春の霞よりは、現在の秋の霧の方が、立ち優つて見えるのであらう。(「秋」は、今の男、「春」は自分の譬。)と詠んだ。女の其の歌への返し。

千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

〔歌意〕 千秋を一日にしても、一日の春に匹敵しませうか、しはしません。が秋の紅葉も、春の花も、何れも頼みにはし難い。共に散つてしまふものです。

註。

秋の夜は春日忘るゝ——古今和歌六帖第五に、同じ歌がある。

九十五段

昔、二條の后にお仕へしてゐる男があつた。同じ殿にお仕へしてゐる女房と互に顔を合はせて心を興へたが、女は、人目を慮おもんばかりかつて早速には逢はうとしないので、男は、何うぞ、せめては物を距てゝなりとも逢つて、長い間、何時逢へるだらうと、はつきりしない心持に思ひ詰めて來た苦しさを、少しなりとも晴らしたいものだと言ひ送つたので、女も其れにほだされて、極めて人目を忍んで、物越して逢つた。様々の物語をした末に、男は歌を詠みかけた。

彦星に戀はまさりぬ天の川へだつる關を今はやめてよ

〔歌意〕彦星——一年に一度よりは妻に逢へないそれよりも、我が戀はまさつて苦しい。其の彦星を距てる天の川の如くにも、我を距てゝある關、御身の其のつれない心を今はやめたまへ。

と言ふと、女は其の歌を愛でて、契なる中となつた。

九十六段

昔、或る男があつた。或る女に想ひを懸けて、とやかく言ひ寄るのが久しい間であつた。女も岩木のやうに非情なものでは無いので、好ましくは思はない男であるが、氣の毒に思つたのもあらうか、やう／＼男をあはれに思つて來た。それは六月の中旬頃であつた。をりふし女は、體からだに腫物しゅぶつが一つ二つ出來たので、男に言つてよこしたには、今はもう心も許しましたので、其方そなたを思ひまゐらせるより外の思ひもありません。が生憎と體からだに腫物しゅぶつが一つ二つ出てをりますし、それにこのひどい暑さでございます。少し秋風が吹き立つて、涼しくなる頃には、きつとお逢ひ致しませうとあつた。さて、秋の立つ頃、此處ここ彼處かしこから、父親の方へ、娘が、其の男の家へ迎へられて行くやうになつて居ると言つて、邪魔を入れて來た。さういふ譯で、此の女の兄が、早速に母親の方かたにゐる女を迎へに來たので、女は急な場合とて、男に便りをする事も出來ない所から、をりから庭に散つて居た楓の初紅葉はつちもみぢを拾はせて、歌を詠んで其れに書き附けた。

秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ

〔歌意〕 秋になつたらばお逢ひしませう、と言ひましたが、其の通りにもなりません、其の秋は來ましたが、徒らに木の葉の散りしく所の江、即ち淺い江となつてしまひました。(「江」は、「縁」の懸詞。)

と書いて置いて、そして家の者に、男の所から使ひをよこしたならば、此れを渡して呉れと言つて、兄に連れられて往つてしまつた。さて其の後は、女の身の上は、よくなつたのか、其れとも悪くなつたのか、在處あつどころも分からなくなつてしまつた。男は、女を恨んで、天の逆手あまのさかてを拍つて、咀つてゐる。怖ろしい事には、男は、人の咀ひは、咀はれる者が負ふか、負はぬか、今に其のしるしを見るだらうと言つて居る。

註。

其の人の許へ——其の男の家へ、の意。當時は男が女の許へ通つて來るのが例で、この場合のやうに、女が男の家へ迎へられるのは異例であつた。

此の女の兄人迎へに來たり——當時は男の子は男親と、女の子は女親と一しよに居るのが例であつた。で此處でも、母親と一しよにゐる妹を、父親の家へ連れて行かうとして、その兄が迎へに

來たのである。

天の逆手——呪ひの業。人を咀ふ時には、祝つてする時、前で拍つのは反對に後で拍つ。それは神代より傳はつた事なので、天の、と言つて居る。

九十七段

昔、堀川の太政大臣と申す方があらせられた。其の方が四十になつた賀を、京の九條にある家でされた日に、中將である翁おきなが賀の歌を詠んだ。

櫻花散りかひ疊れ老いらくの來んといふなる道まがふに

〔歌意〕 櫻花よ、散り合つて、即ち盛んに散つて、疊れよ。老が來ると噂にいつてゐる、その路の紛れるばかりに。

註。

堀川の大臣——大政大臣藤原基經の敬稱。堀川は、地名で、その殿のあつた所。四十の賀——年賀は、四十歳からする風となつて居た。貞觀十七年の春であつた。九條の家——「九條」も、地名で、「家」は、別邸。櫻花散りかひ曇れ——古今和歌集賀歌に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

九十八段

昔、某の太政大臣と申す方があつた。その殿にお仕へしてゐる男が、九月の頃、梅の造花に、雉をつけて奉るといつて、歌を添へた。

我がたのむ君がためにと折る花は時しもわかぬものにぞありける

〔歌意〕 我がたのみまつる君に捧げようとして折る花は、我が頼みまつる心の、何時と分ちの無いやうに、季節の差別もなく咲く、めでたい物である。

と詠んで奉ると非常に面白がられて其の使に祝儀の物を下された。

註。

我がたのむ君がためにと——古今和歌集雜歌上に、初句が、「限りなき」となつて居る。讀人しらす。

九十九段

昔、右近の馬場のひをりの日に、其れを觀ようと集つて來た多くの車の中、此方の車と向ひ合つて置いてある車の、下簾から、馬場の様を觀ようとする女の顔が、ほのかに此方に見えた。此方の車に乗つて居た所の中將である男が、其の女に歌を詠みかけて遣つた。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今日やながめ暮さん

〔歌意〕 見ないのでない、見たでもない人の戀しかつたならば、誰とも知らない人を思ふといふ筋のない事の爲に、今日はながめ暮らす事であらうか。「ながめ」は、歎きをもつて物を見る意。

返歌。

知る知らぬ何かあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ

〔歌意〕その人を誰と知る、知らぬといふやうな事を、何だつて、筋もない差別を立てていふのであらうか。思ふといふその事だけが、案内となつて、相逢はせるものではある。

と言つた。其の時は誰とも知れなかつたが、後には誰であるか男に知れた。

註。

右近の馬場——右近、左近とあつて、袖中抄に「右近の馬場は、一條より大宮の方をいふ。それより東の方は、左近の馬場なり」といつてゐる。

ひをりの日——宮中の式として、これらの馬場で騎射が行はれてゐた。餘材は、續日本記から、聖武天皇の天平年間の騎射走馬の例を引いてゐる。袖中抄は、この騎射の日が「五月三日左近の荒手結、四日右近の荒手結、五日左近の眞手結、六日右近の眞手結にして」といひ「ひをり」はその日の事を、服装から言つたものだとしてゐる。評釋は、近藤芳樹の考證を引いてゐる。整の

百段

昔、或る男、後涼殿と清涼殿との間を通ると、或る高貴の女の方の御局から、忘れ草を差し

衣は萎えばみ、晴の衣はこはく折目正し。このこはきを引折といふ。豪記の、皇后御讀經結願の件に、「右大將衣冠、出紅引折、春日詣の件に、着引折」などある、やがて晴衣の意なり。されば、衣の地厚くて、引折るやうに強き義よりつけたる名にてまた如木と云へり。この晴の衣を引折る日は即ち晴の日の意なり」といふのである。古來、説が多いが、最も解しやすい解である。

車の下簾——婦人の車の鋤で、車簾の下に帷幕のやうに掛けたもの。

見すもあらず見もせぬ人の——古今和歌集戀歌一に、同じ歌がある。作者は在原業平朝臣となつて居る。

知る知らぬ何かあやなく——同じく古今和歌集戀歌一に、「かへし」として、前歌と並んで、同じ歌がある。よみ人しらす。

出して、忘れ草を、忍ぶ草とも言ふのだらうかとお尋ねになつた。それは、其の女の方は、以前男と関係があつたが、宮中へ入つてからは自然消息も絶えてしまつて、男が既に其の方を忘れてしまつたのか、又は人目を忍んで消息も出来ずに居るのか、分からなくなつた。女の方は其れを聞きたいが、側の者がゐるので、態と、其れと無く、縁のある名の草を取り出して、餘所ながら聞いたのである。男は其の草を戴いて、歌を以て答へをした。

忘草生ふる野邊とは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまん

〔歌意〕 忘れ草の生えた野と御覽になるであらうが、此れは忍ぶ草であります。即ち、忘れて我のある事と思し召さうが、我の人目を忍ぶ爲めに消息も出来ずにゐるのであります。従つて、後にまた逢ひまゐらす事もあらうかと、頼んで居ります。

註。

忘草生ふる野邊とは——續古今和歌集戀歌四に、同じ歌がある。作者は業平朝臣となつて居る。

百一段

昔、左兵衛の督である在原行平といふ人があつた。その人の家によい酒があると聞いて、殿上に居た人達が、其の酒の馳走に與からうと言つて、其の家へ集まつた。で、左中辨である藤原良近といふ人を正客にして其の日は饗應をした。此の行平といふ人は、風雅の心のある人で、客の目を喜ばせようと、其の時節の花を多く瓶に挿して飾つた。其等の花の中に、世の常の物では無いまで優れた藤の花があつた。花房のしなつてゐる所が、三尺六寸ばかりもあつた。其の藤の花を題にして、酒間の興にと歌を詠み合つた。歌も詠み終らうとする頃、主人の兄弟である人が、兄が客を招いて饗應の設けをしてゐると聞いて、客をあしらはうとして來たので、捉らまへて一緒に歌を詠ませた。此の人は、もと／＼歌の道はよく知らなかつたので、詠むまいと争つたけれども、無理に詠ませたので斯う詠んだ。

咲く花のしたにかくるゝ人をおほみありしにまさる藤のかけかも

〔歌意〕咲く花の下蔭に隠れる人の多さに、花も其の爲めに榮え増して、在りし以前の日にもまさる所の藤の花ではある。

と詠むと、坐にある者が妙な歌よと思つて、何うして此んな風に詠むのだと言つたので、その男は答へて、太政大臣忠仁公の今榮華の盛りにあらせられて、在りし祖先にもまさつて、藤原氏の殊更に榮えてゐるのを思つて詠んだのだと答へた。と最初妙な歌よと思つた人も、さうした譯かと分つて誹らなくなつた。

註。

在原の行平——貞觀六年左兵衛督に任ぜらる。業平の兄。

よき酒——當時の酒は、各自家で造つた。多くは濁酒で、清酒は尊いものとされた。よい酒といふので、清酒の上等なのが出來たといふ位の意味であらう。

藤原の良近——貞觀十六年左中辨に任ぜらる。太宰員外帥正三位吉野の第四子。

太政大臣——忠仁公藤原良房を指す。

百二段

昔、或る男があつた。其の男、歌は詠まなかつたが、人情はよく辨へて居た。さて、或る上品な女が、尼になつて、世間をはかなんで、京にも居ず、程遠い山里に住んでゐる所へ、以前は同族といふ関係もあるので、歌を詠んでやつた。

そむくとて雲にはのらぬものなれど、世のうきことぞよそになるてふ

〔歌意〕世の中を背いたと言つて、かの仙人のやうに雲に乗つて天上を歩むといふやうなかけ離れた事は無いのですが、世間のいやな事だけは、餘所に、遠いものになるといふ事です。

と言つてやつた。ところで、其の女といふのは、お若くあられた日、齋宮に奉仕された皇女の方であります。